新制

女子國語讀本

第二修正版

巻六

375.9
To11
資料室

42256
教科書文庫
4
810
42-1928
2000301847

文部省檢定濟
昭和三年一月二十四日　高等女學校國語科用

東京開成館編輯所編

新制女子國語讀本

株式會社東京開成館藏版

資料室
3259
Toll

第三學年　一組
奥田拵子

（繪葉書　田邊月村）

廣島大學圖書之印

廣島大學
教
38035
圖書

新制女子國語讀本 第二修正版 巻六

目次

一　聖上崩御……一
二　葬場殿の御儀に參列して（自修文）……若槻とく子……七
三　芒……小島烏水……二
四　鄕土の香を慕ふ……山田邦子……二五
五　星の光（詩）……三木露風……三
六　「相模灘の落日」の鑑賞……友枝照雄……二四
七　鉢物を贈られしを謝す（候文）……下田歌子……三〇

八　旅すゞり……岡本綺堂……三一
九　觀潮樓……永井荷風……三九
一〇　初瀨の夕……德富健次郎……四七
一一　秋窓餘課……德富蘇峰……五一
一二　或過失（自修文）……小酒井不木……五七
一三　名醫……正木不如丘……六五
一四　忘れがたみ……外山正一……七〇
一五　大東京を弔ふ（詩）……西條八十……七六
一六　十六夜日記……阿佛尼……八一
一七　月の夜……樋口一葉……八四
一八　正行の母……（楠公夫人）……八七

一九　最後の參內……（太平記）……九三
二〇　長慶天皇……芝葛盛……九九
二一　正月前（自修文）……沼波瓊音……一〇四
二二　初日の出（詩）……服部嘉香……一〇九
二三　新年葉書……橫山健堂……一一〇
二四　手紙雜感……三宅やす子……一一六
二五　四時の變遷と女子……大町桂月……一二三
二六　婦人と文學的教養……本間久雄……一二九
二七　女流の俳諧……坪內逍遙……一三三
二八　畸人一茶（自修文）……本山荻舟……一三七
二九　夕靄の野（詩）……中西悟堂……一五〇

三〇 仁和寺の法師……吉田兼好…一三三
三一 鬼作左……新井白石…一三六
三二 稅所敦子君を誄す……高崎正風…一四四
三三 歌を選びし旨を報ず（候文）……稅所敦子…一四九
三四 女子海外留學の先驅（自修文）……西村渚山…一五〇
三五 現代歌人の和歌（和歌）……一五五
三六 春の蛙……長塚節…一五八
三七 北京の街……鶴見祐輔…一八五

廣島大學圖書之印

新制 女子國語讀本 第二修正版 巻六

一 聖上崩御

大正十五年十二月二十五日、聖上陛下には葉山御用邸に於て崩御あそばされた。吾等はこゝに吾等七千萬の國民にとつて最も悲しむべく最も痛むべき國家の最大不幸に遭うた。

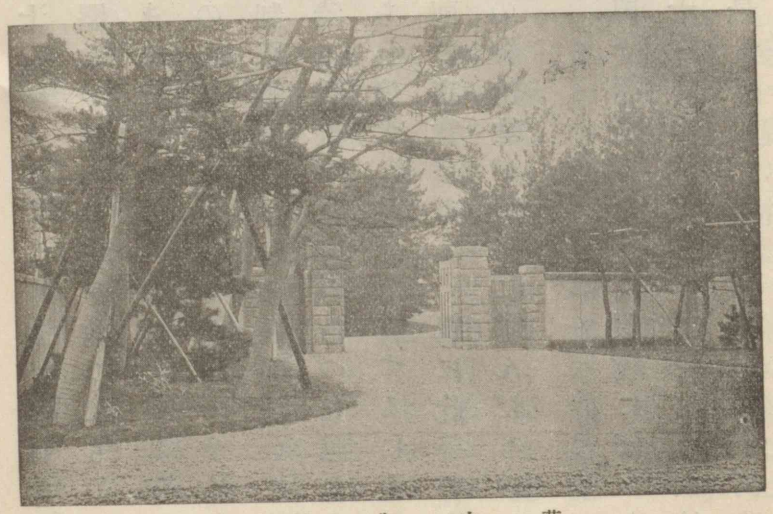
大行天皇は天性至仁に渡らせられ、明治天皇の遺烈を繼いで大統を承けさせられてから、專らその大御心を基として政を統べさせられたので、萬民悅服、皆その御德を頌し奉つてゐた。然るに、陛下には大正十年十一月二十五日、久しきに亙る御疾患により大政を

○この文は大正天皇崩御直後の作である。
聖上陛下 大正天皇。
葉山 神奈川縣三浦郡。

親らせさせ給ふこと能はずとの御理由で、皇太子裕仁親王殿下を攝政に任ぜられ、專ら玉體を保養して御回復を期し給ふ旨を宣布せられた。爾來國民は天地神明に祈願して、陛下の一日も早く御回復あそばされることを冀うてゐたのにも拘らず、その後の御容體はとかく捗々しからず、常に一進一退の御狀態を脱せられず、終に大正十五年十一月十一日、御風氣のため御發熱あそばされた旨が宮内省によつて發表され、同時に、皇太子殿下が九州に於ける大演習御統監のための行啓の御豫定を俄にお取止めになつた旨が發表され

大正天皇

た。陛下の御不例の御看護につき、皇后陛下・皇太子殿下・同妃殿下の御心盡し、その他竹の園生の各宮殿下の御奉仕は、吾等の恐懼して止まぬ所であつた。その御心盡しや御奉仕を承るにつけ、國民の赤誠は火と燃えて、霜を履み、水を浴びて、人皆ひたすら陛下の御快癒を祈り奉つたのであつたが、この國民的祈願も遂に空しく、ここに聖上崩御といふ國家最大の不幸に遭うたのは、何といふ痛恨事であらう。

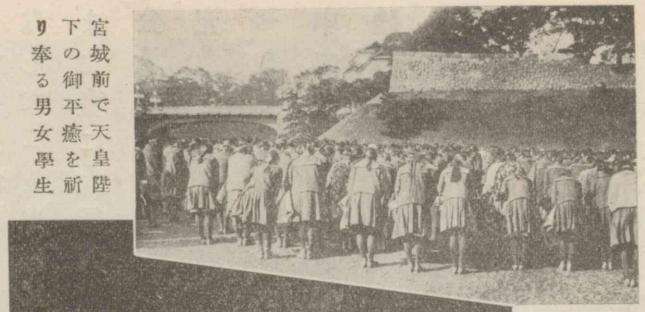


葉山御用邸

伏して惟ふに、大行天皇の御治世十五年は、必ずしも長いとは申上げられぬ。併し、この十五年間の歴史が頗る異彩を放つたものであることは、恐らく誰も異議を挿まぬであらう。即ち大正三年には世界大戰に參加して對獨宣戰の事があり、次いで*ヴェルサイユ Versailles の講和會議、*ウォシントン Washington〔華盛頓〕かれた國際聯盟會議など、國際政治上重大な意義のあつた諸會合に於て、吾が國が重要な地位に立ち、且偉大な勢力を有するに至つたことは、實に吾が國の歴史上空前の事實である。單に此等の事實だけを見ても、如何に大行天皇の御治世が精彩に富んだものであつたかが窺はれるのである。

併し、大正の御代も決して追風に帆を揚げるやうな順境にばかり立つてはゐなかつた。即ち大正十二年の關東地方に於ける大地震・大火事の如きは、國家的逆運の最も著しい例である。數十萬の

*ヴェルサイユの會議　大正八年。
*ウォシントンの會議　大正十年。



宮城前で天皇陛下の御平癒を祈り奉る男女學生

生靈を犧牲にし、幾十億の財貨を燒き盡した大震火災の物質的損害は言ふまでもなく、當時に於ける人心の不安の如何に大きかつたかは、今猶吾等の記憶に新しい所である。而も此等精神的並に物質的打擊に打勝ち、二三年にして終に今日の如き國家の隆昌を見るに至つたのは、一に大行天皇の御聖德によるといふの外はない。その上、世界大戰以來世界的思想の激變に際し、吾が國民は實に振古未曾有の精神的試練に遭うたけれども、而も能くその試練に堪へて、世界に比類のない國風を維持

宮城二重橋

し、顯揚し、國礎をしていよ〳〵強固ならしめ、その間國民の社會生活に多くの不安を感じさせることがなく、時勢に適應した施設をなしたことは、實に大正年間に最も光輝のある一面であるが、これまた實に大行天皇の御仁德の現れと見るべきである。就中萬機公論に決するといふ明治天皇の五箇條の御誓文の御趣旨を御擴充あそばされて、普通選擧法を御公布になつたことは特筆大書すべきである。

申すも畏いことではあるが、大行天皇は御幼少の時から優れた御體質の御持主ではおはさなかつたやうである。その御身を以て多端な國務に御盡瘁あそばされたことが、著しく御健康を損ぜられた原因であつたやうに拜察される。それだけに、吾等は陛下の崩御に對する悲みを現すのに、如何なる言葉を以てすべきかを知らぬ。吾等は天に歎き地に哭して、こゝに臣民の至情を披瀝し、謹

普通選擧法の公布　大正十四年。

んで陛下の登遐を哀悼し奉る。

自修文

二　葬場殿の御儀に參列して

若槻とく子

昭和二年二月七日・八日の兩日に執り行はせられました大正天皇の御大喪儀につき、畏れ多くも私は葬場殿の御儀に參列するの光榮に浴しました。葬場殿には七日の午後七時までに先着するやうにとのことでありましたが、その時間間際になりますと、拜觀者の雜沓のために通行が困難になりますので、定刻よりもずつと早く主人と共に參りました。主人は御葬列に加はることになつて居りましたが、盲腸を少し痛めて居りましたので、特に有難い御沙汰を頂きまして、先着することになつたのであります。

さて葬場殿でお待ちして居りましたところ、七時五十分に皇太后

若槻とく子　當時の內閣總理大臣若槻禮次郎の妻、島根縣の人、明治五年生。

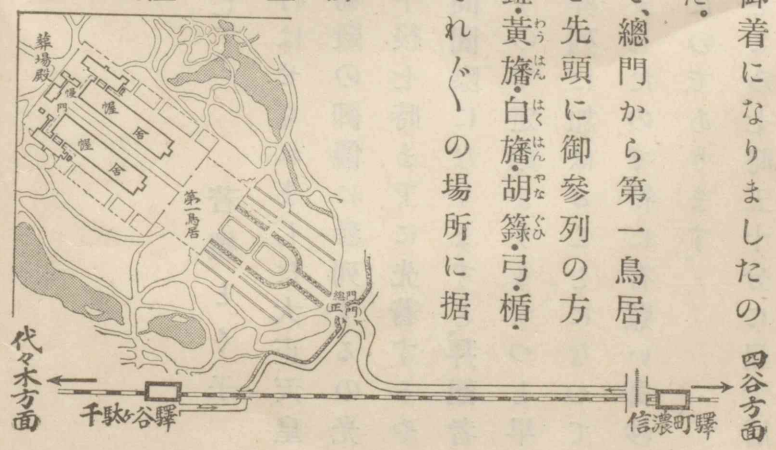
主人　若槻禮次郎、島根縣の人、慶應二年生、貴族院議員。

沙汰　指令、指圖。

陛下が御着になり、八時に天皇陛下が御着になりましたので、一同は起立してお迎へ申上げました。

間もなく、御葬列は鈴懸の並木を縫うて、總門から第一鳥居前面へ向つて肅々と進んで參り、松明を先頭に御參列の方方が入つて來て、幄舍の前に立たれ、鼓・鉦・黃旛・白旛・胡簶・弓・楯・鉾、日月の大旛、御物・御服の櫃、大眞榊がそれ〴〵の場所に据ゑられました。

かゝる間に御轜車は第一鳥居前に差掛りました。天皇陛下・皇后陛下御名代・皇太后陛下には御便殿をお出になつて、これを御奉迎あそばされました。天皇陛下は大元帥の御正裝に喪章を着けさせられ、皇后陛下御名代・皇太后陛下は黑洋



幄舍　神事・祭事などを行ふために庭上に幕を引きまはして設けた假屋。

皇后陛下御名代　この日の皇后陛下御名代は竹田宮昌子内親王殿下であつた。

服の御喪裝でいらせられました。

場内は咳の聲一つ聞えぬ靜けさなので、御轜車の軋る七種の哀音が一入胸に差迫るやうに感じられました。神々しい御轜車が葬場殿の正面に着きますと、天皇陛下・皇后陛下御名代・皇太后陛下は便殿に入御あそばされました。御轜車の牛は放たれ、靈轜は葬場殿内に奉遷されました。

午後九時、葬場殿の幔門が開かれ、天皇陛下・皇后陛下御名代・皇太后陛下には右手幄舍に出御あそばされ、いよ〳〵御式が始まりました。哀調を含んだ誄歌の吹奏と共に、海の幸、山の幸なる御饌が供へられ、五色の幣帛が奠ぜられました。誄歌が終ると、一條祭官長が靈轜の前に進んで、高らかに祭詞を奏せられました。

この時、天皇陛下は殿内に御參入になつて、威儀をお正しになりました。一木宮相德川侍從長は殿外に起立され、劒璽を捧げられた

誄歌　死者をいたみかなしむ歌。

奠ずる　そなへる。

一條祭官長　名は實孝、明治十三年生、海軍大佐、公爵、貴族院議員。

一木宮相　名は喜德郎、靜岡縣の人、慶應三年生、法學博士。

德川侍從長　名は達孝、慶應元年生、伯爵。

御大喪儀行列中の秩父宮殿下（前方）

侍從だけが少し離れて仕へまつつてゐられました。一條祭官長が御玉串（たまくし）を取つて恭しく捧げ奉りますれば、陛下には數歩御靈前に進ませられて御玉串を奉進あそばされて後、數歩お下りになりました。その時、入江侍從次長の奉られました御誄をお取りになつて、再び御靈前に進御あそばされて、これをお奏しになりました。朗々たる玉音にも哀愁の御氣が溢れていらせられました。御誄が終つて陛下が御退下になりますと、皇后陛下御名代、次に皇太后陛下が御拜禮になりまし

玉串　榊の枝に木綿（ゆふ）または紙をつけて神前に供へるもの。

入江侍從次長　名は爲守、明治元年生、子爵。

た。特に皇太后陛下には稍暫し御默禱（もくたう）あそばされ、御靈前を得去り給はぬかのやうに拜しまして、私は涙の込みあげて來るのをどうすることも出來ませんでした。

次いで秩父宮・高松宮・閑院宮を始め各皇族殿下、各妃殿下、並に諸外國の大公使及び特派使節が順次に參進禮拜して退下されました。

次に主人と一木宮相とが參進して誄詞を奏し奉り、それが終つて諸官拜禮の喇叭の音が悲しくも響き渡りますと、幄舍内の諸員は一同起立されました。この一刹那——午後十一時——忽ち陸軍大學校の構内で放たれた弔砲が轟き渡りますと、諸員は一齊に御靈前に拜禮されました。輦轂（れんこく）の下二百萬の市民は素より、動く電車も汽車も自動車も停止し、全國津々浦々に至るまで遙拜默禱したのはこの時でありました。

再び哀しげな誄歌が響くと、御饌は撤せられ、天皇陛下・皇后陛下御

秩父宮　御名は雍仁親王。

高松宮　御名は宣仁親王。

閑院宮　御名は載仁親王。

輦轂の下　天皇の都し給ふところ。

名代・皇太后陛下には便殿に入御あそばされ、幔門は鎖されまして、茲に葬場殿の御儀は終りました。私は靈柩が御輻車から葱華輦に移御されますのを拜して、心惹かれながら退出いたしました。

三　芒

小島烏水

月桂樹が榮光の標章となつてゐるやうに、橄欖の葉が平和の幟牌となつてゐるやうに、芒は土地の原始を象徴するものである。これといふ見どころのないこの禾本科の一植物が、洪荒の宇宙を拓いて、そこにまづ自己の植民地を作り、それから後、人を呼んで、各人各時代の意匠に任せて歴史を描かせ、自分はその歴史の中心から遠のいて、輪郭だけを作つてゐるやうに思はれる。

芒と聯想して何人も想ひ起すのは、武藏野の原始的風光であらう。言ふまでもないが、東京市の前身なる江戸が、なほ殼中に包まれて

葱華輦　屋上に葱花の形をした飾をつけた輿、天皇の乘輿である。

小島烏水　名は久太、高松市の人、明治八年生、横濱正金銀行員。

ゐた時の外皮は武藏野で、武藏野の全身に毛髮となつて被さつてゐたものは芒であつた。

芒は平原を最も先に占領した主人である。「芒のある處に人間の原始があり創造がある」。古今幾千歳、人類興起の歴史が平原史であるとすれば、平原史の表紙に描くべきものは、まづ芒であることを忘れてはならぬ。殊に關八州の歴史は皆さうであつて、所謂阪東武者なる三浦・和田・秩父・北條・千葉・上總などの「いたづらッ兒」は、皆芒が吐き出した產物である。

小島烏水

けれども、これと同時に、芒はまた衰亡史にも伴なふことを忘れてはならぬ。野晒しの髑髏の凹んだ眼から、芒が一二本

關八州　關東八州、箱根以東利根川系に屬する八箇國、即ち上野・下野・常陸・武藏・相模・上總・下總・安房をいふ。

三浦云々　三浦以下皆平家の支族。

出てゐたり、廢寺の床下に芒の穗が戰いでゐたりする光景は、吾人が幼時から震慄を以て迎へた畫題である。

芒は零落性の秋を代表し、秋の草を代表し、なべての秋草にありがちな寂しく悲しいといふ特徴を代表してゐる。萩があつても、女郎花があつても、芒がなければ秋にならぬ、秋の平原にはならぬ、秋の寂寥を磅礴させぬ。常磐木の松があつても、柏が茂つてゐても、二三本の芒さへあれば秋になる、寂寥の感じを起させる。だから、芭蕉は骸骨が能をしてゐる畫に、「稻妻や顏のところが芒の穗。」と題した。顴骨の

芒

芭蕉 松尾宗房、伊賀國の人、江戸時代前期の俳人、元祿七年（一六九四）歿、年五十一。

高くなつた禿山に芒があり、雙頰の削り落された荒野に芒があり、總じて血色を失つた不毛の土地には芒があるものである。かういふと、芒は廢亡や零落や絶滅に行く牖戸の飾として、自然が意匠した象徴のやうである、墓前の樒の如くに！　嗚呼、ばう〳〵として、針のやうに尖り、刃のやうに冷たい芒よ、爾は諸の不祥を包藏する大藪林であるか。それなら余は爾を忌まねばならぬ。實際、芒が一本ぬつと立つてゐるところは、亡國を豫言する老巫女のやうに氣味が惡い。

要するに、芒は土地の原始を潤色し、また併せて人間の終局を修正する役を有する一種の標章的植物であるのである。（山水美論）

四　鄕土の香を慕ふ

秋とゝせかへりて江戸をさす故鄕。

山田邦子

山田邦子 本名は今井邦枝、政治家今井健彦の妻、長野縣の人、明治二十三年生、歌人。

芭蕉翁の句を讀んで、今更に感慨が深い。

私が故郷の信州諏訪を去つたのは、今から十四五年も前のことであつた。ひたすらに藝術の道へ志して、巣立鳥のやうに、已むに已まれぬ思で東京へ出て來たのであつた。

嚴寒の國、山深い國、因襲の強い國、さうした國に芽ばえた若い心は、どのやうに暖い國に憧れ、蒼い海に憧れ、文化の都に憧れたことであつたらう。その憧れは、遂に郷土を厭はせるやうになつた。こんな寒い國を出て行きたい、こんな不便な片田舎から遁れ出たい、こんな氣むづかしい因襲から解き放たれたい、さうして、大手を振つて胸一杯の歌を歌つて見たい、心行くまで物を學びたい。……かう思ひきつて故郷を後にした時、私の胸は前へ向つてたゞひたすらに走つたのであつた。深い山の隧道(Tunnel)を幾つも抜けた汽車が、黄昏の色の薄蒼く漂うてゐる武藏野にさしかゝつた時、若かつた私

の瞳は感激の涙に潤うてゐた。おゝ、何と柔い廣々とした平野の夕暮であつたことよ。山國の自然が恐ろしいまでに威嚴を以て人に迫つて來るのに比して、武藏野の遠い草生に沈んで行く夕日の光は、見通しのつかぬ野に開かれた豐かな田畑のたなつものに柔く溶け入つて、互に愛を囁いてゐるやうな平野の夕暮であつたことよ。

いく山を越えて來りぬ暖き
都の夜にまづ涙湧く。

が、しかし、旅に住む日が一年二年と積つて行くにつれて、私は始めて故郷の持つ、

ごく目立たぬ、特殊でない、氣の付かぬ中に養はれきつてゐる安住の有難さを、やう〳〵に身にも心にも思ひ出すやうになつたのであつた。

都會の動搖して止まぬ烈しい空氣は、人事的にまた社會的に、私の心と身とを疲らせきつてしまつた。廣々とした武藏野の平野に沈み行く夕日も、そこに、他郷の、何とも名づけ難い、例へば竹馬の友ならぬ寂しさがある。とにかく途中から住むものの隔たりは、また人力で如何ともすることの出來ぬものであることを味はひ知つて來たのである。私は、故郷の人々の持つ、ごく頑固な心に寄るべくもない自分であることを知りながら、それを越えてたゞ眞直に故郷そのものの味が戀しかつた。頑冥な四圍の空氣に縛られきつてゐる身を解き放たれたいといふ願が急で、たゞひたすらに燃え立つた若い心には映るべくもなかつたもの、例へば、嚴寒の眞

夜中にふと目覺めて、聞くともなしに聞いた水瓶の水の氷りきつて割れて行く、小さいながらに鋭い響、ぴん、ぴんと、間をおいて凍み割れるその音を聞きながら、何等不安住の思もなく、またすや〳〵と眠り入つて行くあの安らけさの思出。一日の大根引が終つて、赤い夕日の落ちて行く鹽尻峠の峰の方へ向つて合掌してゐた亡き祖母の後姿の深い印象。それらがぐい〳〵と私の心を故郷に引き付けた。

諏訪湖を隔てて鹽尻峠を望む

鹽尻峠　長野縣東筑摩郡。

春の休暇に、きまつて祖母に連れられて行つた、山鳩の啼く三里山奥のその里の家。そこへ行く道すがら、路下の平に開かれた水田の中に働く村の人達が、孫を連れて里の家に行く祖母に向つて送つた祝福の聲。聲そのもののやうな笑顔。さうした幼い日の思出も懷かしい。

山田邦子

凡べては過ぎ去つてゐるのに氣がついた。その時私は切ないまでに郷土の香を慕つたのであつた。

歸れば、そこに昔ながらの家があり、土藏の白壁に夕日が射して、裏の小瀧の音は單調な響をそのまゝ傳へてゐる。町並も昔馴染の家ばかり、そこに動いて來た都會風の空氣、文化の空氣があるとしても、郷土の眺は深いのである。けれども、もはやその地その中に安住

してゐられる私の身でも心でもないことに、深く〳〵目覺めさせられるのである。

たま〳〵歸つて、昔ながらの古い大きな家に幾日を過して、更に切に思はれるのは、凡べて私の懷かしんでゐる郷土の味は、その土に根をおろし、その空氣を吸うてそこに生きてゐる、そこから生れる肉身のやうな味であつて、時に體がこの家に歸つて來たとて、例へば、一旦他に嫁いだ家の娘が、稀に訪れる里の家から感ずるはかない懷かしみの味に過ぎぬ。身命の根ざしてゐる處は、やはり出でてそこに生を營んでゐる「東京」のそこにあることを思はせられるのである。

育てられた祖母は死に、町娘であつた時代ももう去つた、去つて再び歸らぬ。年に一度夏には歸つて、親みの深い信州獨得の味噌汁を吸ひながら、こんなことを思つて、物寂しくまた東京へ歸つて來

るのである。

ふと來りまた歸り行く今の身に、
なじめぬ焚火たいてさびしむ。

五　星の光

三木露風

いと清き緑の星よ。
冬の夜の蒼ずみたる
大空よ數知れず
輝きて更け行きぬ。

野も山もはた森も、
雪積り白くなりたり。
降り歇みて靜けさの中、

三木露風名は操、兵庫縣の人、明治二十二年生、詩人。
○本課は黒柳勲の筆にかゝる。

星は皆瞬く如し。

森の葉の垂れたるに、
雪の積りたるが
仄白うして、
幽寂と神秘とを感ぜしむ。

あゝ清く白き夜よ。
我一人空を仰ぎ、
遠き故郷を思ひ、
そぐろまも人を思ふ。
我胸を抱きて、

雪の上を徜徉へば、
御空より星の光、
永久の輝を放てり。

六　「相模灘の落日」の鑑賞

友枝照雄

秋冬風全く凪ぎ、天に一片の雲なき夕、立つて伊豆の山に落つる日を望むに、世に斯かる平和の又多かるべしとは思はれず。

冒頭の一段は強い表現である。一讀已に吾人は別天地の門戸を窺ふの感がある。「世に斯かる平和の云々」の結句によつて、吾人は自然に興味を唆られ、進んで平和の殿堂の内陣まで進まうとする要求を生じて來る。けれども、「立つて」とだけあつて、其の場所が示してない。是は後段に至つて始めて理解される手法になつて居る。是にも讀者に尙一歩進ませようとする力があ

相模灘の落日　德富健次郎の作。德富健次郎は、舊號は蘆花、熊本縣の人、文學者、昭和二年歿、年六十。

友枝照雄　福岡縣の人、明治十三年生、東京外國語學校教授。

夕陽を浴びた富士山

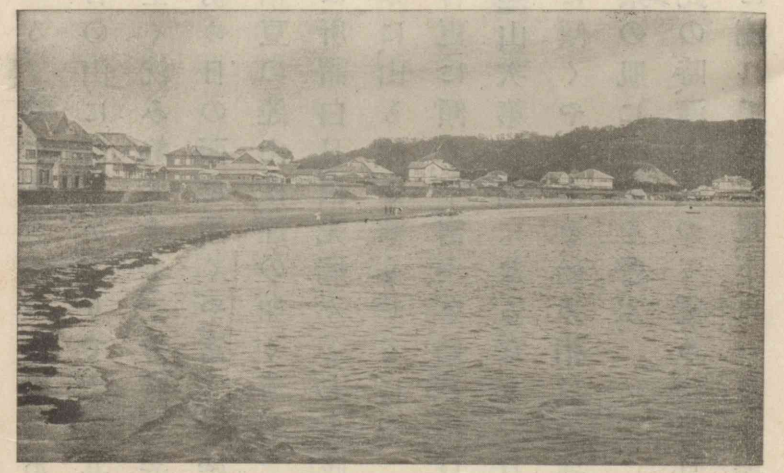
る。特に注意すべき點である。日の山に落ちかゝりてより、其の全く沈み終るまで、三分時を要す。初め日の西に傾くや、富士を始め相豆*の連山は煙の如く薄し。日は所謂白日、白光爛々として眩しきに、山も眼を細うせるにや。日更に傾くや、富士を始め相豆の連山次第に紫になるなり。日更に傾くや、富士を始め相豆の連山、紫の肌に金煙を帶ぶ。此の時、濱に立つて望めば、落日海に流れて我が足下にいたり、海上

相豆　相模國と伊豆國。

の舟はみな金色を放ち、逗子の濱一帶、山と云はず、砂と云はず、家と云はず、松と云はず、人と云はず、轉がりたる生簀の籠も、落ち散りたる藁屑も、赫焉として燃えざるはなし。

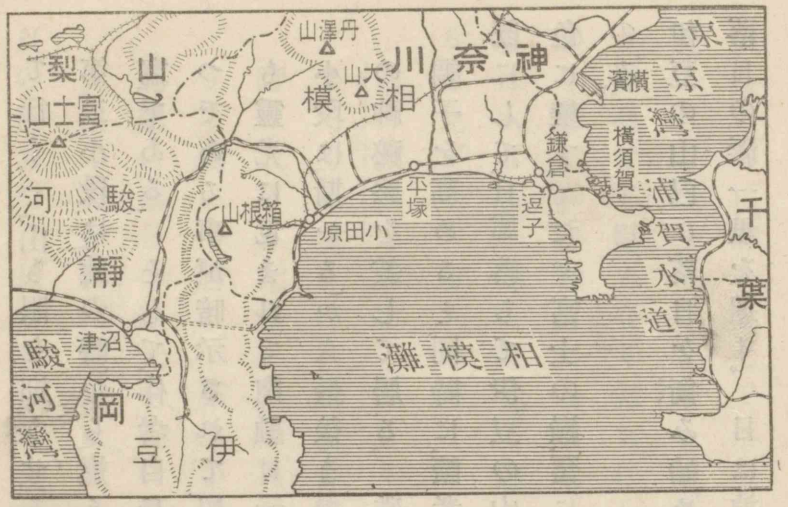
斯かる風の夕に落日を見る身は、恰も大聖の臨終に侍するの感あり。莊嚴の極み、平和の至り、凡夫も靈光に包まれて肉融け、靈ひとり端然として永遠の濱に行むを覺ゆ。

物あり、融然として心に沁む。喜



逗子の海岸

逗子　神奈川縣三浦郡。



びと言はんは過ぎ、悲みと言はんは未だ及ばず。

此の段は更に三段に小分する事が出來る。第一小段は初から「金煙を帶ぶ」までで、遠景の描寫である。伊豆の山に刻一刻落ちて行く夕陽の樣を、極めて印象的に敍してある。初め「日の西に傾くや」と言ひ、次に「日更に傾くや」と言ひ、最後に「日更に傾くや」と言つて、落日に伴なひ、時間的に變つて行く自然の色彩美を味はせるとともに、吾人の心を何處までも唆つ

て行く。「山も眼を細うせるにや」は、特に印象の深い表現である。第二小段は「此の時」から「燃えざるはなし」までであつて、近景の描寫である。そして、作者自身も赫焉として燃えて居るものの一つである事が暗示されて居る。此處に第三小段に於ける「凡夫も靈光に包まれて肉融け云々」の伏筆を見る事が出來る。第三小段は「斯かる」から最後までであつて、自然の精神に沒入して其の神祕感を敍して居る。殊に「大聖の臨終」と云ふ比喩は、全篇の調子を高めると同時に、讀者に襟を正させる力がある。

既にして、日愈〻落ちて伊豆の山にかゝるや、相豆の山忽ちに印度藍色に變ず。たゞ富士の巓、舊に依つて紫の上に更に金光を帶ぶるのみ。

伊豆の山已に落日を銜み始めぬ。日一分を落つれば、海に浮べる落日の影一里を退く。日は迫らず、寸又寸、分又分、別れ行く世をば

顧みがちに、悠々として落ち行く。

既にして殘り一分となるや、急に落ちて眉となり、眉切れて線となり、線瘠せて點となり、忽ちにして無し。光消えて海も山も蒼然として憂ふ。眼を擧ぐれば世界に日なし。日は入りぬ。而も餘光の忽ち箭の如く上射し、西空金よりも黃なるを見ずや。偉人の歿せる後實に斯くの如し。

此の段は二小段に分れる。第一小段は初から「忽ちにして無し」までである。作者得意の筆が愈〻鋭くなつて、落日の最後の一瞬時に於ける光景を、微に入り細をきはめ、まざ〳〵と目に見るやうに描いて居る。第二小段は「眼を擧ぐれば」から終までである。此處に落日の餘光を說いて偉人を喚び起し、讀者をして偉大な人格の力を自然に思はせる。

日の落ちたる後は、富士も程なく蒼ざめ、頓て西空の金は朱となり、

燻りたる樺となり、上りては濃き藍色となり、日の遺蘂とも思はる（くすぶ）（ゐけつ）る明星の、次第に暮れ行く相模灘の上に眼を開きて、明日の出日を約するが如きを見るなり。（自然と人生）

此の段は吾人をして暗黑の中に光明を認めさせる。明星を日の遺蘂と呼び、且は明日の出日を約して居るやうに見るところに、永遠を思ひ永遠を追うて居る作者の面影も彷彿して居るのである。（國文新講）

七　鉢物を贈られしを謝す

下田歌子

昨日は珍しき鉢物態々御持たせ下され、誠に有難く、厚く御禮申上候。昨夜は遲く歸宅致し候爲、今日に至り水をやり居り候所へ、私の學校の女生徒、自製の品を持參致しくれ候。技藝はなほ未熟にて、御目に懸け候程の物には御座なく候へども、御厚志を

下田歌子　故下田猛雄の妻、岐阜縣の人、安政三年生、實踐女學校長、愛國婦人會會長。

嬉しく感じ候折柄のこととて、粗品差上候。決して昨日の御禮などと申す譯にては御座なく候。御笑留下され候はば本懷に存ずべく候。百事拜顏の上にと匆々かしこ。

七月二日

下田歌子

松居眞玄樣

御もと

末筆に相成り候へども、何卒御母堂樣・御令室樣へ宜しく御鶴聲希ひあげ候。

岡本綺堂

八　旅すゞり

一心太

川越の喜多院に櫻を觀る。一重はもう盛りを過ぎた。紫衣の僧は落花の雪を袖に拂ひつゝ行く。

岡本綺堂　名は敬二、東京市の人、明治五年生、文學者。

川越　埼玉縣。

喜多院　天台宗の寺、星野山無量壽寺といふ。

境内の掛茶屋にはいつて休む。何か食べるものはないかと婆さんに聞くと、心太（ところてん）だけだといふ。試みに一皿を買へば、價八厘。

花をさそふ風は梢を騷がして、茶屋の軒も葭簀（よしず）も一面に白い。私は悠然として心太を啜る。

天海僧正の墓の前で、私は少年の昔に返つた。

二　天狗

廣島の町を行く。冬の日はかげつて寒い。

忽ちに横町から天狗が現れた。足駄を穿いて、矛をついて、何處へ行くでもなく徘徊して居る。一人ならず、其處からも此處からも現れた。何れも十二三歳の子供である。宿に歸つて聞けば、今日は亥（ゐ）の子（こ）の祭だといふ。數多の小天狗はそれがために出現したらしい。

空はやがて時雨となつた。神通力のない天狗どもは、雨の中を右往左往に逃げて行く。

その父か叔父であらう、四十前後の大男は、一人の天狗を小脇にひつ抱へて駈け出した。

僧天海の墓

天海僧正　俗姓は三浦氏、諡號は慈眼大師、會津の人、高僧、東叡山寛永寺の開祖、寛永二十年（一六三〇）歿、年百八。

廣島の亥の子祭

亥の子の祭　十月の節句、初亥の日に行ふ。

三　唐がらし

日光の秋八月、中禪寺を指して舊道を辿る。

紅い鳥が青い樹の間から不意に飛び出した。形は山鳩に似て、翼も嘴も皆深紅である。案内者に問へば、それは俗に「唐がらし」といひ、鳴けば必ず雨が降るといふ。

鳥は忽ち隱れて見えず、谷を隔てて二聲三聲。私達は恐れて道を急いだ。仲の茶屋へ着く頃には、山も崩れるばかりの大雨となつた。

岡本綺堂

四　夜泊の船

船は門司にかゝる。小春の海は、浪も驚かず、風も寒くない。

酒を賣る船、菓子を賣る船、うろ〳〵と漕ぎ廻る。石炭を積む女の手拭が白い。

向河岸の下關はもう暮れた。壽永の陵はどの邊であらう。何を呼ぶのか、人の聲が水に響いて遠近に聞える。四面のかゝり船は追々に灯を揭げた。すべて源氏の船ではあるまいか。私は敵に圍まれたやうに感じた。

壽永の陵　阿彌陀寺陵をいふ、安德天皇の御陵、下關市阿彌陀寺町にある。

五　蟹

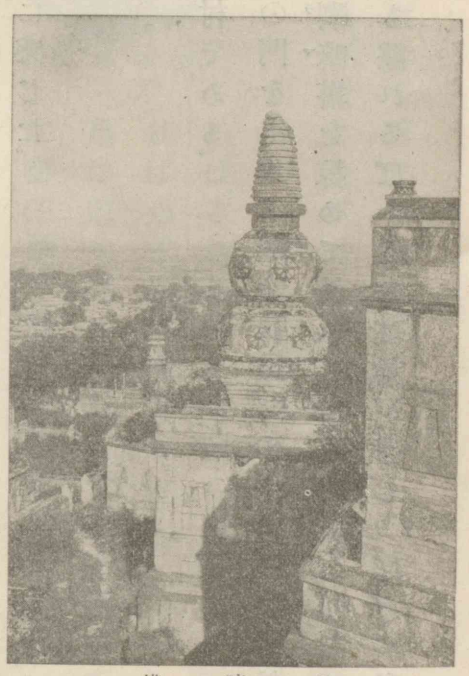
遼陽城外、すべて綠楊の村である。

秋雨の晴れた夕に宿舍の門を出ると、斜陽は城樓の壁に一抹の餘紅を留め、水の如き雲は喇嘛塔を掠めて流れて行く。

南門外は一面の畑で、馬も隱れるばかりの高粱が、俯しつ仰ぎつ秋風に亂れて居る。

遼陽　滿洲奉天省中部の都會、市街は城壁をめぐらしてある。

村落には石の井があつて、その邊は殊に楊が多い。楊の下には支那人が籃を開いて蟹を賣つて居る。大きい蟹は尺を超えたのもある。「半江紅樹賣鱸魚」は王漁洋の詩である。夕陽村落、楊の深い所に蟹を賣つて居るのも、一種の詩料になりさうな情趣で、今も忘れない。



喇嘛塔

半江紅樹賣鱸魚（クハレノ）江干多是釣人居、柳陌菱塘（ナリシレ）一帶疎、好是日斜風定後、半江紅樹賣鱸魚（ヲ）。（眞州雜詩）

王漁洋　名は士禎、支那清代の大官、詩人。（1634―1711）

六　三條大橋

京は三條の邊に宿つた。六月初の朝日は賀茂川の流に落ちて、雨

後の東山は青いといふよりも黑く眠つて居る。

この邊の名物といはれて居る大津の牛が柴車を牽いて、今や大橋を渡つて居る。柴の上には、誰の風流ぞ、紫の露の滴る菖蒲の花が挿んである。

三條大橋

紅い日傘の小娘が橋を渡つて來て、恰も柴車とすれ違つて行く。

處は三條大橋、前には東山、見るものは大津牛・柴車・花菖蒲・繪日傘、京の景物は凡べてこゝに集つた。

七　またゝび

信濃の奥に踏み迷つて、おぼつかな

くも山路を辿る夏の夕暮に、路傍の草木の深い間に、白點々、さながら梅の花の如きを見た。

後に聞けば、それはまたゝびの花だといふ。猫にまたゝびの諺はかねて聞いてゐたが、その花を見るのは初めてであつた。

天地蒼茫として暮れんとする夏の山路に、蕭然として白く咲いて居るこの花を見た時に、私はいひ知れぬ寂しさを覺えた。

八　雞

秋雨を衝いて箱根の舊道を下る。笈の平の茶店に休めば、此處は神崎與五郎が博勞の丑五郎に詫證文を書いた故蹟だといふ意味を書いた立札が見える。

五六日前に、修學旅行の學生の一隊が此處に休んで、一羽の飼雞を盗んで行つたと、店の主婦が甘酒を汲みながら口惜しさうに語つ

た。「あいつ、どろばうだ。」と、三つばかりの男の兒が母のあとに附いて、廻らぬ舌で罵つた。この兒に始めて「どろばう」といふ言葉を教へた學生達は、今頃どこの學校で勉强して居るだらう。

赤穗義士の立札は雨に濡れてゐた。（十番隨筆）

九　觀潮樓

永井荷風

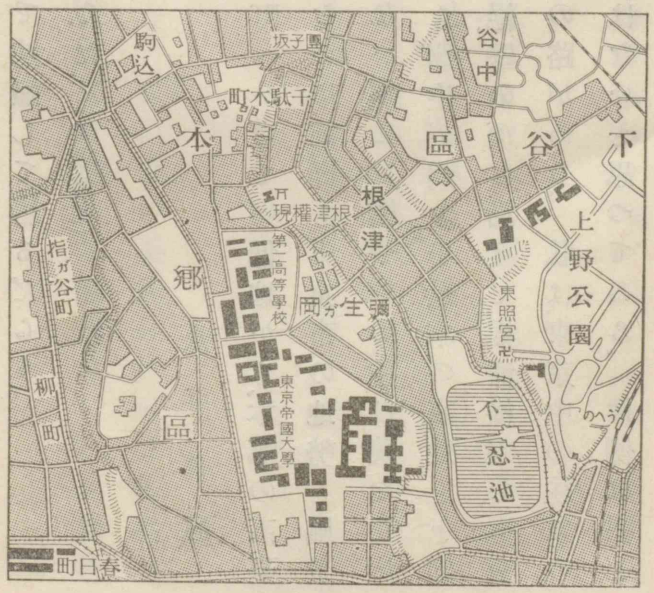
小石川春日町から柳町、指が谷町へかけての低地から、本郷の高臺を見る處々には、電車の開通しない以前、即ち東京市の地勢と風景とがまだ今日ほどに破壞されない頃には、樹や草の生ひ茂つた崖が現れてゐた。根津の低地から彌生が岡と千駄木の高地とを仰げば、こゝもまた絶壁である。絶壁の頂に沿うて、根津權現の方から團子坂の上へと通ずる一條の路がある。私は、東京中の往來の中で、この道ほど興味のある處はないと思つてゐる。片側は樹と

永井荷風　名は壯吉、東京市の人、明治十二年生、文學者。

根津・彌生が岡・千駄木・團子坂　ともに東京市本郷區。

根津權現　須賀神社ともいふ、本郷區駒込追分の東北にある。

竹藪とに蔽はれて晝でも暗く、片側は我が歩む道さへ崩れ落ちはしないかと危まれるばかり、足下を覗くと、崖の中腹に生えた樹木の梢を透かして、谷底のやうな低い處にある人家の屋根が小さく見える。隨つて向ふは一面に遮るもののない大空が限りもなく廣々として、浮雲の定めない行方をも自由に見極められる。左手には上野谷中に連なる森が黑く、右手には東京の市街が一目に見晴らされ、其處から起る雜然たる巷の物音が距離のために和らげられて、



上野・谷中ともに東京市下谷區。

あのヴェルレーヌ*の詩の「かの平和なる物の響は街より來る。……」といつたやうな心持を起させる。

當代の碩學森鷗外*先生のお邸は、この道のあたり、團子坂の頂に出ようとする處にある。二階の欄干に倚ると、市中の屋根を越して、遙かに海が見えるとやら。それゆゑに、先生はこの樓を觀潮樓と名づけられたのだと聞き傳へてゐる。私は度々この觀潮樓に於て親しく先生に見える光榮に接したが、多くは夜になつてからのことなので、惜しいかな、一度もまだ潮を觀るの機會に遭遇したことがない。その代り、私は忘れられぬほど音色の

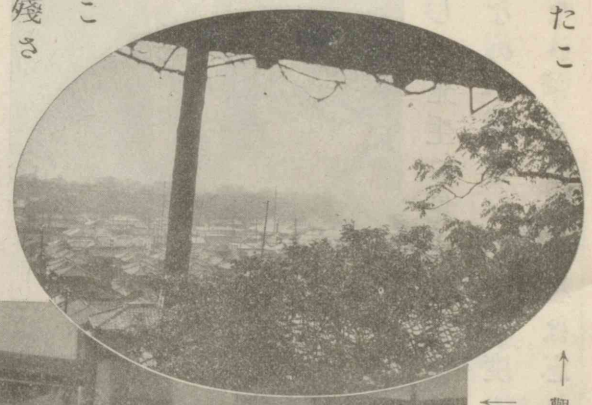
森鷗外

ヴェルレーヌ　佛國の詩人。(1844—1896)

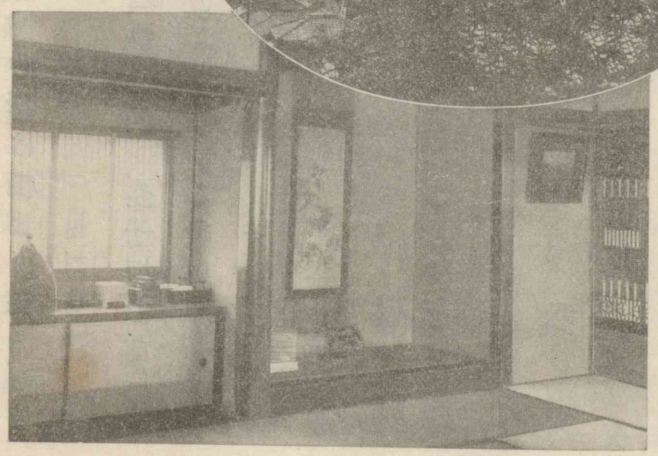
森鷗外　名は林太郎、島根縣の人、文學博士・醫學博士、陸軍軍醫總監、帝國美術院長、帝室博物館總長、宮內省圖書頭、大正十一年歿、六十三。

深い上野の鐘を聽いたことがあつた。

日中はまだ殘暑の去りやらぬ初秋の或夕暮であつた。先生は大方食事中でもあつたものか、私は取次の人に案内されたまま、暫くの間たゞ一人この觀潮樓の階上に取殘された。樓は確か八疊に六疊の間であつたと記憶してゐる。一間の床には、何か謂はれのあるらしい「雷」といふ一



↑觀潮樓から望んだ東京市街



←觀潮樓の客室

字を石摺にした大幅が掛けてあつて、その下には、古い支那の陶器であらうと想像される大きな六角の花瓶があつたが、花一輪挿してないために、却つてこの上もなく嚴格にまた冷靜に見えた。座敷中には、この床の間の軸と花瓶の外には、全く何一つ置いてなかつた。額もなければ置物もない。四枚立の襖の明け放してある次の間を怖る〳〵窺ふと、中央に机が一脚置いてあつたが、それさへ云はば臺のやうなもので、一枚の板と四本の脚とがあるばかりで、抽斗（ひきだし）もなければ彫刻の飾も何もない机で、その上には、硯もインキ壺も紙も筆も置いてはなかつた。併し、その後に立ててある六枚屏風の裾からは、紐で束ねた西洋の新聞か雜誌のやうなものの片端が見えたので、私はそつと首を延ばして差覗いて見たところ、いづれも大部の物と思はれる種々な洋書が、座敷の壁際に高く積み重ねてあるらしい樣子であつた。世間には往々讀まぬ書物を

森林太郎

森鷗外自署

殊更人の見る處に飾り立てて置く人さへあるのに、これはまた何といふ一風變つた癖癖であらう。私は「柵草紙」以來の先生の文學とその性行とについて、何となく沈重に考へ始めようとした。恰もその時であつた、一際高く漂ひ來る木犀の匂と共に、上野の鐘の音が殘暑を拂ふ涼しい夕風に吹き送られて、明け放した觀潮樓上にたゞ一人主人を待つ間の私を驚かしたのであつた。

私は音のする方を眺めた。千駄木の崖の上から見るあの廣漠たる市中の眺望は、今しも蒼然たる暮靄に包まれ、一面に烟り渡つた底から、數知れぬ燈火を輝かし、雲のやうな上野谷中の森の上には、淡い黃昏の微光を夢のやうに殘してゐた。私は、シャヴァンヌ（Chavannes）の描いた聖女ジェネヴィエーヴ（Geneviève）が、靜かにパリ（Paris）の夜景を見下してゐ

柵草紙　もと森鷗外が主宰してゐた文學雜誌。

シャヴァンヌ　佛國の畫家。（1824—1898）

ジェネヴィエーヴ　パリの守護神。

るあのパンテオン（Pantheon）の壁畫の神祕な灰色の色彩を思ひ出した。鐘の音は長い餘韻の後を追ひかけ〳〵撞き出された。その度毎にその響の湧き出る森の影は暗くなり、低い市中の燈火は次第に光を增して、車馬の聲は嵐のやうに却つて高く、やがて鐘の音の最後の餘韻を消してしまつた。私は茫然として再びがらんとして何物も置いてない觀潮樓の內部を見廻した。そして、この何物もない樓上から、この市中の燈火を見下し、この鐘聲とこの車馬の響とを代る〴〵に聽き澄ましながら、我が鷗外先生は靜かに書を讀みまた筆を把られるかと思ふと、實にこの時ほど、私は、先生の風貌をば、シャヴァンヌの壁畫中の人物同樣、神祕に感じたことはなかつた。

永井荷風

パンテオン　佛國の殊勳者を祀つてある處、もとジェネヴィエーヴのために作つた敎會である。

永井荷風

永井荷風自署

ところが、「やあ大變お待たせした。失敬、失敬。」といつて、先生は書生のやうな態度で、二階の梯子段を上つて來られた。金巾の白い襯衣一枚、その下には赤い筋のはいつた軍服のズボンを穿いて居られたので、何の事はない、鷗外先生は日曜貸間の二階か何かでごろ〳〵してゐる兵隊さんのやうに見えた。

「暑い時はこれに限る、一番涼しい。」といひながら、先生は女中が持ち運んで來た銀の皿を私の方に押出して、葉卷を勸められた。先生は陸軍省の醫務局長室で私に對談される時にも、きまつて葉卷を勸められるのであつた。若し先生の生涯に聊かでも贅澤らしいことがあるとするならば、それはこの葉卷だけであらう。

この夕、私は親しくオイケン*の哲學に關する先生の感想を伺つて、夜も九時過再び千駄木の崖道をば根津權現の方へ下り、不忍池の

オイケン Eucken　ドイツの哲學者。(1846—1926)

後を廻ると、こゝにも聳え立つ東照宮*の裏手の一面の崖に、木の間の星を數へながら、やがて廣小路*の電車に乘つた。（荷風全集）

一〇　初瀬の夕

現代法

徳富健次郎

耳梨山*を左に、天香久山*を右に見て東走し、櫻井*で汽車を降りるとすぐ初瀬*行の輕便鐵道に乘換へる。輕便鐵道の小さな客車は櫻井から東を指して、がた〳〵と二十分ばかり谷間を上つて、終點初瀬驛に着く。車で石ころの多い坂路を挽き上げられて、初瀬の町は紀の國屋の店頭に信玄袋を卸すと、すぐそのまゝ長谷寺*に急がす。もう秋の日は落ちかけてゐる。爪先上りの初瀬町の往き止りで車を降りる。西に折れて、石甃を歩いて仁王門に入る。すぐ廻廊の屋根下である。

緩勾配の石段が次第に上方に導く。數間おきに金輪の燈籠が下

東照宮　東京市下谷區上野公園内にある徳川家康の廟。

廣小路　上野公園の南。

耳梨山・天香久山　奈良縣、ともに大和三山の一。

櫻井　奈良縣。

初瀬　奈良市の東南六里二十町。

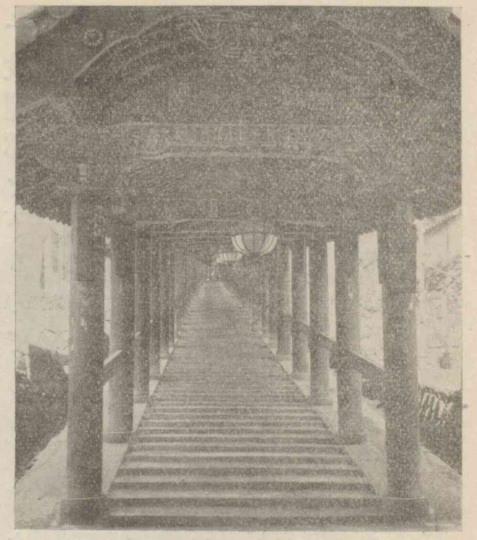
長谷寺　初瀬町にある、眞言宗の寺。

つてゐる。廊の左右には玉石を疊んだ牡丹の花壇が續いてゐる。長谷寺の生命はこの廻廊にあるのだ。長い〳〵廻廊は仁王門から西に攀ぢ登つて北に折れ、稍暫く登つてまた西北に折れ、かくて本堂に登り着く。

百九間半、四百幾十の石段を登り果てて、山腹に建てられた本堂の舞臺に出た。世を捨てた西行法師が、捨てられて尼になつた昔の妻に、ゆくりなく廻り會うたはここであつたか。本尊の觀音樣は

長谷寺

西行法師　俗名は佐藤義清、鎌倉時代の歌僧、建久元年（一八五）歿、年七十三。



長谷寺の廻廊

あとにして、まづ舞臺の端から見下す。向ふの山も此方の山も燃え立つ焔の山かとばかり紅葉は今眞盛りである。初瀬の町は赤地錦の袋に包まれて、その底に横たはつてゐるのである。

もう仄闇い内陣に、鎌倉のと同作の觀音樣など拜ませて貰うてゐる内に、日は落ちてしまつて、焔の山は紫に暮れ、蒼い朦朧の漂ふ谷に響いて入相の鐘が鳴り始めた。その鐘の音に送られつゝ、我儕も廻廊の降口にかゝる。煙の如く立迷ふ黄昏を仄かに照らして、廻廊には最早燈籠に灯が入つた。默つてその灯の連續を見下してゐた我儕は、やがて仄かなそ

鎌倉のと同作の觀音　神奈川縣鎌倉町大字長谷の海光山長谷寺の本尊十一面の觀音は大和國長谷寺の觀音と同木で作つてある。

長谷寺の十一面觀音の像

の光を便りに、一段々々廻廊の石段を降り始めた。

えもいはれぬいみじの薄明りよ。こゝに大正二年はない。どうしても源氏物語から拔け出して來た白い顏の玉鬘かさもなくば差俯く墨染の西行が登つて來なければならない。美しいもの哀れ深いものに出遇ふ期待をどこやらに漂はせながら、我儕は一段一段廻廊を下るのである。時々立ち止まつて後を見返ると、昔から限りない人の炷いた心の香が一つに融け合うて作つたかと思はれる薄青い朦朧を見せて、仄かな火がぽつり〳〵上へ〳〵と上つてゐる。下の方を見ると、下へ〳〵とその火が續いてゐる。一たび折れる、二たび曲る。最後に長い〳〵廊の灯が遙かに下に續いてゐる。どうしても誰かに何かに會はねばならない氣がする。しかし、期待は破れた。我儕は人一人にも會はず、到頭三折の長い廻廊を仁王門に下りてしまうた。（死の蔭に）

大正二年　作者の參詣した年。

玉鬘　源氏物語の中の女性の人物、玉鬘が長谷寺に詣でたことは源氏物語玉鬘の卷に出てゐる。

一一　秋窓餘課

一　大善と小善

徳富蘇峰

身を殺して仁を成すが如きは、大善だ、最大善だ。而も、斯樣な機會は、各人の一生中に、必ず有り得べきでなく、又決して漫りに希ふべきでもない。之に反して、吾人が小善をなすべき機會は時々刻々にある。此の機會を見遁さず取外さない事は、吾人日常の心得でなければならぬ。予は小兒の時、父母の膝下で、小學の句讀を授かる際に讀んだ、劉玄德が、「善の小なるを以て爲さざる勿れ、惡の小なるを以て爲す勿れ。」と言つた言葉を、今もまだ記憶して居る。そして、今に於て此の言葉の意味が深長である事を憶ふ。併し、一歩を進めて考へれば、大善も小善も善は善だ。一萬斤の黃金も黃金であれば、一オンスの黃金も亦黃金だ。必ずしも大小の區別を設けて、大を採り小を棄てるべき理由はない。否、吾人日常の生活を愉

徳富蘇峰　名は猪一郎、熊本縣の人、文久三年生、徳富健次郎の兄、國民新聞社長、貴族院議員。

小學　六卷、宋の朱熹の門人の編、古來の嘉言善行を類輯してある。

劉玄德　名は備、支那三國時代の蜀の主。（163—223）

オンス　英國の目方の單位の稱、一オンスは我が約七匁六分弱。

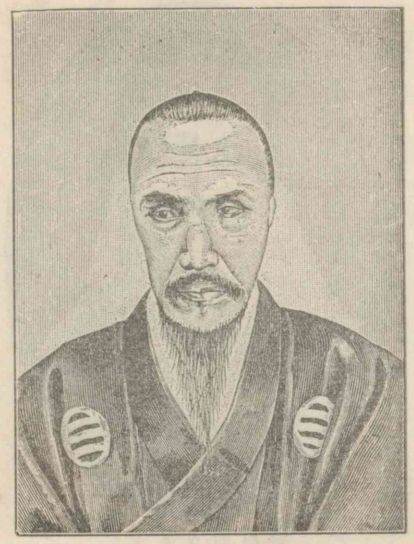
快にし幸福にするのは、寧ろ凡べての人が相奬めて、所謂小善を行ふのに存するとも云ふ事が出來る。自分が犬糞を踏んだからとて、知らぬ顔して、次に來る人に之を踏ませるのは不心得の至りだ。一寸注意さへすれば是が功德になるではないか。

劉玄德

二　萬事と一事

人は萬事を做す事が出來ないのを怍ぢるには及ばぬ。一事を做す事が出來ないのを怍ぢよ。多能を誇とするな、無能でないのを誇とせよ。我が國に、「萬能ありて一心足らず。」と云ふ諺がある。西洋にも、「凡べての業に渉りて、一事をも解せず。」と云ふ語がある。共に彼是屋を警めたものだ。

彼是屋は時に取つて調法だ。但し、調法がられるのは他人からの事で、當人に取つては極めて損だ。世には、如何なる方面に於ても、其の專門家と對等の地位を占める者がある。彼は凡べての專門家である、否、彼の專門それ自身が百科全書的であると言ふことが出來る。新井白石*とか、佐久間象山*とか、最近に於ては、故森鷗外（獨逸）もそれに近かつた。ドイツ前皇帝（Deutsch）の如きも、其の腕前如何は別として、當人の抱負は確かにそれだつた。彼等は全く一種の天才だ。尋常人が斯樣な野心を懷くのは破滅の基だ。併し、如何に天才でも、餘りに多方面に頭を突き込むのは危險だ。況して天才でない者は猶更である。



佐久間象山

新井白石　名は君美、江戸の人、江戸時代前期の政治家・學者、享保十年（一七二五）歿、年六十九。

佐久間象山　名は啓、信濃國の人、明治維新の志士、元治元年（一八六四）歿、年五十四。

ドイツ前皇帝　ウィルヘルム第二世。（一八五九—）

人は一藝に通じるだけで澤山だ。其の他は道樂として隨意に樂しめばよい。而も道樂が餘り多方面に渉れば、其の道樂さへ身の重荷となり本業の妨害となる。故に、道樂も選擇する必要がある。

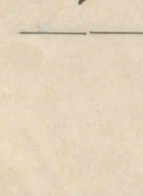
ドイツ前皇帝

擔ひ得ぬ重荷を擔うて腰を拔かすのは莫迦の骨頂だ。我が力相當の荷物なら、之を擔うて遠きに行く事も出來る。多藝・多能は羨むべきでない。勗むべきは一藝・一能・一業・一務を完全に仕遂げる事だ。

三　精力の集中

成功の祕訣は努力にある。然り努力にある。努力せよ、努力せよ、

努力せよ。併し、一生努力しても遂に何事をも爲し得ない者がある。是は其の人の不運と言ふべきである、不幸と言ふべきである。天道是か非か と叫ぶべきは正に此の事であらう。翻つて考へると、努力して成功しないのは、其の努力の方法に何かの缺陷があるからではあるまいか。目的を定めず、手段を講ぜず、徒に狂犬の如く驚馬の如く鼻切牛の如く、只無茶苦茶に狂ひ廻つたとて、勿論成功すべきではない。如何に努力して掘ればとて沙中から金の出る筈はない、石の上に網を投げても魚の捕れる筈はない。努力は必要だが、思慮のある賢明な努力が最も必要だ。そして、其の上に必要なのは限定的の努力だ。言ひ換へれば、精力を集中する事だ。如何に賢明な方法でも、餘りに手を八方に張り廻せば、虻蜂二つながら捕れない虞がある。人はどんな場合にも自信力



徳富蘇峰自署

が必要だ。而も我が力を過信すれば意外の蹉跌を來す。故に、賢明な努力の第一義は、我が力を測量し、之に相應するだけの仕事を選取して、それ以外には一切手を觸れない事だ。即ち自己の精力に匹當する事業の範圍を劃定して之に全力を集中する事だ。

徳富蘇峰

四　社會心の教養

社會心とは我が周旋する仲間に就いての心得方だ。言ふまでもなく、人は群をなす動物だ。其の群をなすに於ては不文律がある。其の不文律は銘々の社會心が湊合して成るべきものだ。社會心とは、手短に言へば、我及び我が仲間と云ふ心だ。仲間の中に我を置き、我の中に仲間を置く心だ。今少し約めて言へば、彼我一如の心

だ。苟も斯の心があれば、十人でも百人でも千人でも萬人でも、直ちに一團となる事が出來る、一團となつて其の苦樂を偕にする事が出來る。然るに、我あつて人なき場合には、只兩人相對してさへも事は圓滑に行かぬ。況や十人をや百人をや千萬人をや。我と我との角突合には、只百害があつて一利がなく、社會は乍ち修羅の巷となるものだ。

自修文

一二　或過失

小酒井不木

平凡の内に過ぎ去つた青春時代を振返つて見るに、別にこれと云ふ珍しい思出話もない。が、唯一つ、高等學校時代に、私の注意が足りなかつた爲に、或人の一生の方針を誤らせた事は、今になつても氣掛りになつてならない。併し、其の人は今或は立派に世渡りを

小酒井不木名は光次、愛知縣の人、明治二十三年生、醫學博士、

して居るかも知れない。何分其の後杳として消息に接せぬから、其の生死さへ明かでない。若し其の人が死んでゐたら兎に角、生きてゐたら、あの當時の事を書くのは、言はば其の人の古傷から血を流すやうなもので、頗る心苦しいけれども、私自身に取つては、あの當時の心をありのまゝに述べる事が、非常に私の心を輕くするから、茲に書いて見ようと思ふのである。

考へやうによつては、私の執つた態度は當然過ぎる程の當然であつたかも知れない。併し、私がもう少し深い注意を拂つたら、あんなに事を大袈裟にせずに濟んだであらうと、非常に殘念な氣持がする。其の人の友人達は、其の當時竊かに私の態度を非難してゐたらしいが、確か學年試驗時分の事であつたので、其の後間もなく暑中休暇となり、隨つて特に面責されるやうな事もなかつた。

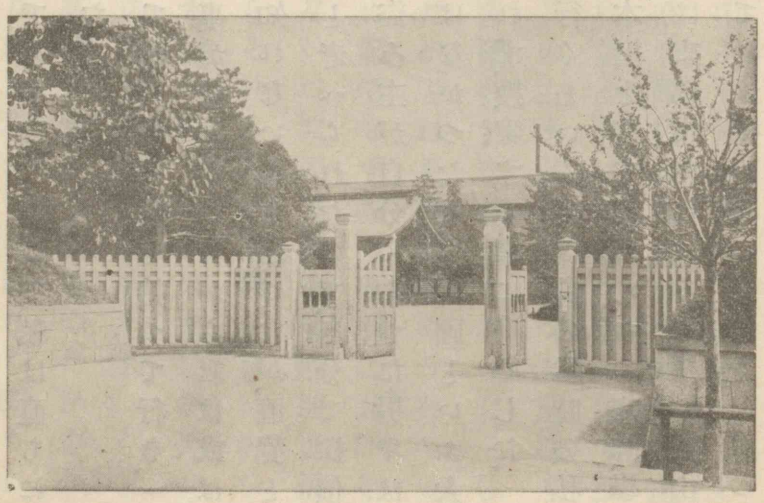
其の頃、私は三高の寄宿舍にゐた。私は餘り學費が豐かでなかつ

杳　くらくはるかなさま。

面責　面と向つて責める。

三高　京都市にある第三高等學校の略稱。

た爲に、參考書などを買ふ事が出來ず、或時二部（今の理科）のSといふ友人から、ワトソン（Watson）の物理學の原書を借りた。凡そ十日間も借りてゐたと思ふが、いつの間にか其の原書が紛失して居る事を發見した。若しそれが自分の書物であつたら、まあ仕方がないと思つて諦めたかも知れない。併し、其の書物は友人Sの所有であつて、若し見付からなかつたら、買つて返さなければならない。而もそれは古本でも三四圓もするか



第三高等學校

ら、其の當時の私に取つては大金であつた。そこで、私は直ちに其の書物の行方を捜す事に決心した。

それまで、寄宿舍では、舍生が默つて他人の書物を持つて行き、一二日過ぎてから返しに來るやうな事が時々あつたから、私は或は誰かが默つて借りて行つたのかも知れないとも思つたが、直覺といはうか、どうも盗まれたに違ないと考へられたので、自分で探偵して見ようと思つた。若しや其の盗み主が自分の知つた男ではあるまいかといふ考も起らないではなかつたが、三四圓といふ大金の事を思ふと、ぢつとしては居られず、捜索する事に決心した。

盗まれた書物が質屋か古本屋へ行くといふ事は、其の當時の私にも見當がついたから、私は先づ古本屋を捜す事にした。高等學校の生徒を相手にして居る古本屋は、京都市内にはそんなに澤山はないから、一軒々々調べても大して骨は折れないだらうと思つた。

捜索　さがしもとめる。

古本屋は高等學校の附近にも澤山あつたが、盗み主は恐らくそんな近い所では賣るまいと思つて、高等學校から比較的離れた處から捜し始めた。所が、幸運な事には、眞つ先に訪ねた古本屋で、私の尋ねる書物が發見された。私が其の古本屋にはいつて見廻すと、ワトソンの原書の古本が五六册書棚の上に並べてあつた。私は顫へる手で其の一册々々を調べたが、どれも皆似たやうなもので、私も友人の書物のこととて明瞭に記憶せず、友人も別に認印を押したり名前を書いたりして置かなかつたので、確かな鑑別を行ふ事が出來なかつた。でも、どうやらそれらしい書物が見付かつたので、早速友人Sを連れ、一緒に古本屋へ行つて其の書物を見せると、流石にSは一目でそれが自分のである事を斷言した。

そこで、私は古本屋の主人に此の書物を誰から買取つたかを訊ねようと思つたが、若し私達がなまじ口を利かうものなら、隱されて

しまふかも知れないと思ひ、尙又、賣主が自分の本名を告げる譯もあるまいと思つたので、其の場は何喰はぬ顏をして、友人Sにそれとなく其の書物を見張つてゐて貰ふやうに賴み、學校に歸つて、一伍一什を生徒監のH先生に話した。

小酒井不木

H先生は事情を聞いて、「それは捨てては置けない。僕も一緒に行つてやるから、これからすぐK警察署へ訴へよう。」と言つて、どし〳〵先頭に立つて歩き出した。軈て私達は友人Sに逢ひ、三人でK警察署に行き、係の刑事に事の顚末を話した。すると、刑事は私に向つて、「若しや、あなたの友人の中に犯人があるやうだつたら、お困りではないでせうか。」

顚末　始から終までの事情。

と訊ねた。其の時、H先生は、私の返答を待たず、「たとひ犯人が誰であつても、學校の爲に徹底的に調べて欲しい。」と斷言した。そこで、刑事は私達を待たせて置いて、半町と隔たつてゐない古本屋へ行き、問題の原書を取返して來てくれた。

若し犯人が僞名を使つてゐたなら、或は知れずに濟んだかも知れなかつた。併し、犯人は自分の本名を告げて書物を賣つたのであつた。私は其の犯人が私の能く知つて居る生徒であることを知つて、非常に驚いた。併し、最早どうする事も出來なかつた。そして、其の生徒は學校を退學させられるの餘儀なきに至つた。後で分つた事だが、其の生徒は、私の書物ばかりでなく、他の舍生の書物をも盜んで、他の古本屋に賣つたさうであつて、其等の書物もそれ〴〵其の所有主に戻り、唯古本屋だけがとんだ迷惑を蒙る事に

小酒井不木自署

なつた。

其の生徒は確か一人息子で、お父さんは教育家であつたさうである。當人は退學させられただけで、學校當局の骨折によつて、別に法律の制裁は受けなかつたと思ふが、お父さんは自分の勤めてゐた學校を辭職して、謹慎されたと云ふ事であつた。私はそれを聞いて非常に悲しかつたが、如何ともする事が出來なかつた。若し私が今少し注意深く考へたら、犯人は自分の知つて居る生徒であるかも知れないから、迂濶（うくわつ）には行動する事が出來ないと思ひ付いたかも知れない。或は又、古本屋の主人に事情を話して、事を穏便に取計らふ事が出來たかも知れない。併し、私は持前の探偵癖によつて、一本調子に進んで了ひ、到頭取返しの付かない事を仕出來（しでか）したのである。

無論其の生徒も一時の出來心で行つた事であるから、そんな悲慘

迂濶　うつかり。

な結果にならうとは夢にも思はなかつたであらう。それを警察沙汰にしたのは、今から考へて見れば誠に無理解な話である。況してそれによつて其の生徒の一生の方針を誤らせ、其のお父さんを悲境に陥れたのだから、無理解どころか實に罪な話である。かう考へて見ると、言はば私の若氣の至りでやつた事が愈々後悔されてならないのである。

思へば、それはもう十七年も昔の話となつた。其の後、其の人はどうしたか、私は少しも知らない。が、私はいつも此の事が氣にかゝつて居る。さうして、私は何時も此の事を私の所謂「青春時代の過」の大きなものの一つとして數へて居るのである。願はくは其の人に幸あれ。

一三　名醫

正木不如丘

正木不如丘長名は俊二、明治二十年生、醫學博士、慶應義塾大學病院内科部長。

私が福島の病院にゐた頃、一生に一度かも知れぬほど名醫の名を馳せた話がある。

柿の秋の頃、一人の新患者が診察室に現れた。木綿の綿入に木綿の袴をはいてゐた。此の患者は既往症・現症を語ることが甚だ巧妙で、稀に見る斯道の天才であつた。患者大學の卒業生に屬する彼の言ふ所を一應聽いた後、私は二三の質問をした。胸部の疼痛が左乳部の深所で、一種名狀し難いものであると云ふ訴に對して、「其の痛みは今にも死ぬかと思ふやうな不安のものですか。」と問うたら、「いや驚きました。仰の如く今にも死ぬかと思ふ痛みです。」と答へた。

細心の注意を以て私が診察した後に、彼は、「病名など伺つても素人には何にもなりませんから伺ひません。只十分な治療を願ひます。」自分は今公職にあるので、若し急に死亡することがある樣子

ならば、早く相當な死後の處置をして置きたいと思ひます。どうぞ遠慮なく打明けて下さい。」と言つた。

余も考へた。此の患者は相當以上に物の分つた男である。事實を打明けて置く方が彼の爲であらうと思つたので、「或は突然一時間內外の苦痛で、不幸の轉歸を取らぬとも計られぬと思はれます。まあ私も十分方法を講じますが。」と打明けて話した。彼は非常に滿足して、「委細の事が分明になりまして、大變安心致しました。併し、なるべく死にたくありませんから、藥も飲み、又十分御命令の如く致します。」と言つて、彼は歸宅した。

それから二日目に、突然某村の醫師から電話がかゝつて、一昨日診察を受けた病人は、彼の居住地の村長であるが、昨日突然死亡した。そして、病名が不明で困却して居るから、參院當時の診斷を話してくれと言つた。余は診療簿を取調べた後、病名は狹心症であると

答へた。其の醫師は「はゝあ成程。」と感心して、電話を切つた。半月を經て、余は郡内の巡廻に出掛けた。某村を二人引の車で通ると、「やあ、來た、來た。」と、吃驚して居る余を、消防夫總出で村役場へ引入れて了つた。余は一向譯が分らぬので、役場の玄關に下り立つて、「どうしたのです、一體。」と聽いた。余は此の村を素通りして先の村へ行く豫定なのであつた。「まあ、とにかく。」と、余を部屋の中へ入れて了つて、盃をさす、御馳走をする、婚禮の時のお聟樣のやうに厚遇した。かけつけ三盃の頃になつて、始めてぽつ〳〵と語り出すのを聽くと、此の村の村長が例の病死人であることが分つた。村長は余に診察を乞うた日、歸村すると直ちに臨時村會を召集し

正木不如丘

て、「自分は突然死ぬかも知れぬから。」と言つて、村治に關する凡べてを彼等に打明けて後事を託し、又自分の家へ歸つた後、親族を集めて後顧の憂のないやう、言ふべきことを言つた。其の翌日、彼は村役場の風呂に入つて、小使に背中を流させながら、「俺は死ぬなら今日のやうな日だ。一切後の事を賴んで了つたしするから。」と言つて、浴後助役と將棋を始めた。そして、王樣が九死一生の羽目に陷つた時、「うゝん」と言つたまゝ大往生を遂げて了つた。

正木不如丘自署

かう云ふ話をしてから、村會議員の一人が、「一體病氣は何と云ふのです。」と余に聽いたので、余は言下に「腦溢血。」と答へた。死亡診斷書の死因は、恐らく余が福島で診察した時の狹心症となつてゐたらう。それにしても、大層御馳走になつた手前が恥かしかつた。

余は、二日前にぴん〳〵して六里の道を病院まで徒歩で來た村長

の死を、二日前に豫言する神樣のやうな醫者と褒められて、面目を施したまゝ又車に乘つた。村界まで消防夫總出で車を押して來たことは勿論であつた。（診療簿餘白）

一四　忘れがたみ

外山正一

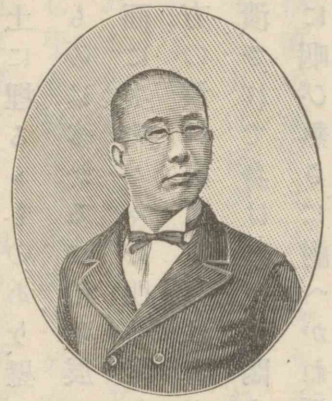
げに人ははかなきものなり。今日の夜は未だ過ぎざるに、只管明日明後日の事にのみとかく心を移しがちにて、いかなる天の災がすぐ眼前に迫ればとて、「一寸先は闇」の譬、明日ともいはず、今宵の中に深き淵瀨に陷ることもあらん身とはつゆ知らずして、百年の計をなすこそあはれなれ。

泣くものも、笑ふものも、喜ぶものも、怒るものも、舞ふものも、唄ふものも、樂しむものも、齊しく一度に聞きたるは地底に聞えし大山の崩るゝばかりの響なりけり。

外山正一（とやま）東京市の人、文學博士、文部大臣、明治三十三年歿、年五十三。

凄じき勢にて大地は下より突き上げられ、地上はさながら激浪の打つが如くに震ひ動けり。

安政二年十月二日、時刻は夜の亥の刻かとよ。地裂け天墜つるかと驚かれたり。



外山正一

見る〳〵、百萬の人家・倉庫・神社・佛閣、倒るゝあり、崩るゝあり。家に敷かれ瓦に打たれて死せるもの幾許なるかを知らず。一時に落ち來る千萬の瓦、一時に崩るゝ百萬の家の響は、泣き叫ぶ老若男女の聲に和し、譬ふるに物もあらざりけり。暫くして、地の震やゝ收まり、崩るゝ家の響薄らぐに隨ひ、あとに殘りて聞ゆるは、親を呼ぶ子の聲、子を尋ぬる親の聲なりけり。

安政　孝明天皇の年號。（一八五四―五九）

亥の刻　今の午後十時頃。

近くにも、遠くにも、殊にあはれに聞ゆるは、次第々々に細くなる「助けてくれ、助けてくれ。」の聲なりけり。

ことわりなるかな、梁に壓さるゝものあり、柱に挾まるゝものあり、土に埋るゝものあり、壁に敷かるゝものありて、さらぬだに苦しむものは多かるに、地の震ふこと未だ止むか止まぬに、四方の天は一面に次第々々に明るくなりて、さながら晝の如くなりしは、處々方方の潰れ家より火は炎々と燃え出でて、燄の天を焦すなり。家に潰されて身は動かず、悶え苦しむその處に、燃え來る火のために、煙に咽び熱さに耐へかね、遁れんとしてあせれども遁るゝこと叶はねば、聲を限りに叫べども、助けに來る人はなく、無間の地獄阿鼻の熱、無慚といふも餘りありけり。

この夜わづかの時の間に、死したる人のその數は幾千萬なるかを知らざるが、その中には、いともあはれなる死にざまのものも多か

りけり。

運強くして不思議にもその身は萬死を遁れたれど、親・兄弟の無慚の死をそゞろに悲しむものもありけり。

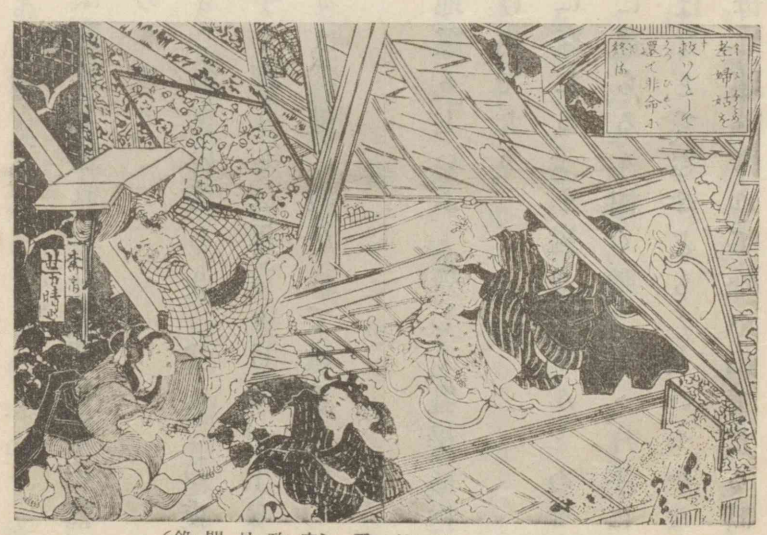
此等は人の身の上なり。我にもこの夜の話あり。父はこの夜は宿直（とまり）の番にて、家を守り三人の子を護りしは母なりけるが、上なる子二人は母の左右に寐ね、末なるは乳母に抱かれて枕邊に臥しゐたりき。

あるまじきことなれども、「すは地震よ。」といふと齊しく、乳母は抱きし子を捨てて、我のみ外へと逃げ出でたり。

母は啼く子を抱き上げ、右と左に寐たる子を搖り起さんとあせれども、稚子を抱へし身にて、大浪に搖らるゝ如く動きつゝ、片手に起す左右の子は、冬の夜の寐入りばなとて、起せども〳〵、いつかないつかな起くればこそ、夢ながら母に連れられて外へ出でたる時は、

地の搖るゝも止みしあとにて、四方の天は火事にて既に眞赤になりゐたり。

實に危かりしは我等親子の命なりけり。そも安政の地震には、水地なる舊家の潰れぬものは稀なりしが、我等が住まひし舊家も潰れぬばかりに傾きたり。今に於て想ひ起すも身の毛よだつはこの夜のことなり。この地震にて我等が家の若しや潰れもしたらんには、我等兄弟は死したりとも、誰をも恨む



安政の大地震（安政見聞錄）

水地　江戸本所・深川あたりの低地をいふ。

べきならねども、若し母の死したらんには、我等が罪にてありたるならん。

さりながら、この夜若し我等親子が死したらば、何故母が死せしかは、世に知る人はなかりしならん。生くべかりしを子のために死せりとは誰か知るべき。

今もなほ忘れざるは、久しき昔のこの夜のことなり。げにありがたきものは母の愛なり。母はその身の危きをも顧みずして、一心に子を助けんとなししなり。

げに深きは親の恩なり。我に今日あるは、この愛を以て育てくれたる母ありしがためなり。我は自ら知らざれども、我が母がこの夜の如くに、その身の危きをも顧みずして、我等の身を護りくれたるは幾度なりしか知られざらん。

この夜のことは亡き母の我には忘れがたみなり。この夜我等親

子より運拙くして死せるものには、助かるべきを子の故に死した
る母の幾許なるらん。
この夜の如き天災の今日の夜にも起らんには、助かる命を子のた
めに捨てんとする母親は幾許なるか知られざらん。げに深きは
親の恩なり、忘れがたきは母の愛なり。（新體詩歌集）

一五　大東京を弔ふ

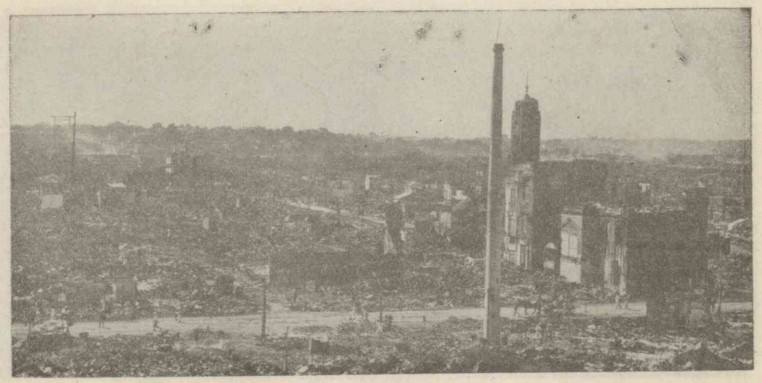
西條八十

少年の日、
私の手飼の小鳥は、
野良猫のために咬み殺された。
古びた籠のほとりに
落ちてゐた美しい羽根を、
私は幾日間飽かず眺めて流涕したことか。

西條八十
東京市の人、明治二十五年生、詩人、早稲田大學教授。

そのまゝの傷ましい思を、あゝ東京よ、
私は今おまへの上に感ずる。

むごたらしく引裂かれた殘骸よ、
散亂した羽毛よ、
あゝ永遠に逝いて返らぬ物の愛惜し
さ。——
その上に、大輪の月は夜々
白紙のやうに蒼白めては昇り且沈み、
私は昨日も今日も寂しく、
飢ゑた獸の如く彷徨する。
たゞ見る、茫乎として天空に連なる褐
色の焦土、



大正大震火災直後の神田・九段方面

ところ〴〵黝く丘の如く横たはる壞
れた土藏、
煉瓦壁、くすぼれる金庫。——
またジプシーのそれに似たトタン張
の避難小屋。——
さうしてこの雑子も啼かぬ燒野原を、
點々木瓜の花の如く彩るは、
罹災者の喰ひさした西瓜の皮だ。

今日晝、私は旅人のやうに草鞋がけで
この野を過り、
被服廠の跡に山と積まれた
赤大根のやうな無慚な燒死體に、

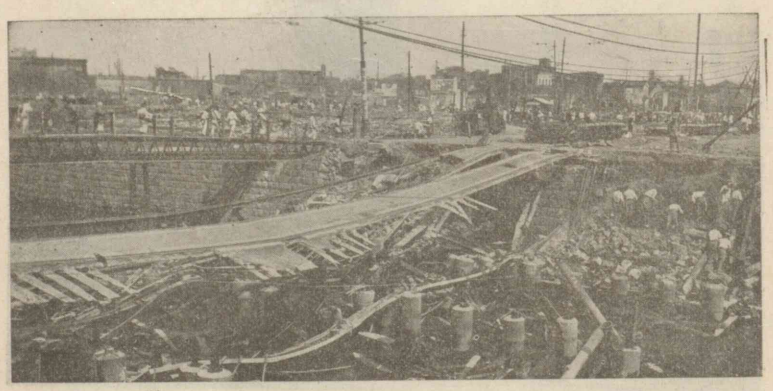
大正大震火災直後の宮城前廣場

ジプシー　Gypsy. 白色人種の一種、アジヤの西部からヨーロッパ、南北アメリカにかけて散在する漂泊種族。

雑子も啼かぬ燒野原　「燒野の雑子夜の鶴」といふ諺によつていつたのである。

被服廠　東京市本所區。

心ばかりの野菊の花を手向けて來た。
その歸途、神田橋畔に、
私は天空を暗くして低飛する燕の大
群を見た。
彼等もやはりその塒を失つたのだ。
大いなる包を背負つて、
薄暮の街頭を右往左往する人々と等
しく。——
だが、もう秋だ。
塒を失つた渡鳥は、日ならず海の彼方
に、
温かいすみかを求めて行くであらう。
けれども、衰れなる人の子は、この糧を



大正大震火災直後の神田橋

神田橋　東京市麹町區と神田區とを連ねる橋。

も褥をも持たぬ市民等は。——

黄昏、疲れて郊外の我が家に戻れば、

此所はまた別世界に似た靜けさ、しめやかさ。

一本の蠟燭の下に家族等は集ひ、

さゝやかな夕餉をしたゝめてゐる。

何もかも元のまゝだ。

眞晝路傍に見た、あの痛ましい大景は、

遂に一箇の幻ではなかつたらうか。

大正大震火災直後の淺草公園

けれども、耳許の事實が直ちにこの明るい疑念を裏切る。

京橋の家を燒かれた兄夫婦が、

この春盲ひた老母に、暗い一隅で、かう話しかける。

「お母さん、私達ももう二度とあの東京は見られませんよ。あなたと同じことですよ。」

一同は愕然として覺えず箸の手を止め、

一齊に落ち窪んだ老母の眼窩を見つめる。

孔雀の彩羽のごと燈火うるはしい昨日の都會の縮圖に、限りない哀慕の念を寄せる。

一六　十六夜日記

阿佛尼

二十七日。明けはなれて後、富士川をわたる。朝川いと寒し。數ふれば十五瀨をぞ渡りぬる。

阿佛尼　藤原爲家の妻、鎌倉時代の歌人、弘安六年（一九四三）歿、年七十五。二十七日　建治三年（一九三七）十月。

さえわびぬ雪よりおろす富士川の
川風こほる冬のころもで。

今日は日いとうらゝかにて、田子の浦に打出づる海士どもの漁するを見ても、心からおりたつ田子のあまごろも、ほさぬ怨みと人に語るなとぞいはまほしき。伊豆の國府といふ處にとゞまる。

阿佛尼

二十八日。伊豆の國府を出でて、箱根路にかゝる。いまだ夜深かりければ、たまくしげ箱根の山を急げども、なほ明けがたき横雲の空。

足柄山は道遠しとて、箱根山にかゝるなりけり。いとさかしき山

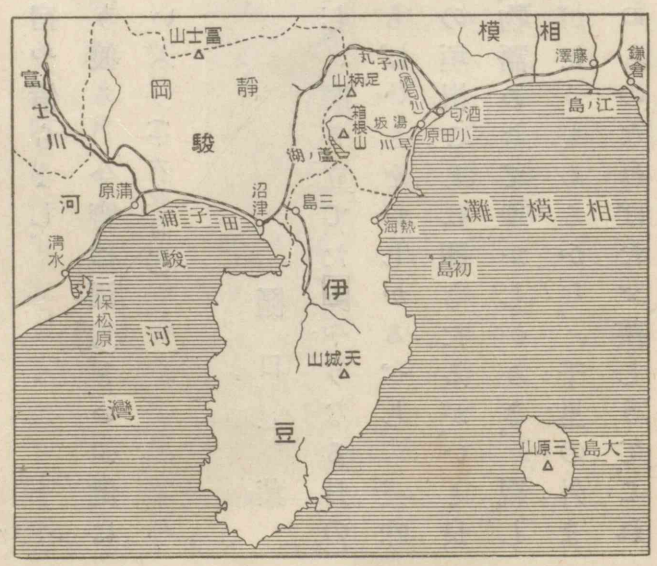
田子の浦　駿河國、富士川河口の南岸。

伊豆の國府　伊豆國三島町。

を下る。人の足もとゞまりがたし。湯坂とぞいふなる。辛うじて越えはてたれば、また麓に早川といふ川あり。まことに早し。木のおほく流るゝを「いかに。」と問へば、「海士の藻鹽木を浦へ出さんとて流すなり。」といふ。

あづまぢの湯坂を越えて見渡せば、しほ木ながるゝ早川のみづ。

湯坂より浦に出でて、日暮れかゝるに、とまるべき處とほし。伊豆の大島まで見渡さるゝ海面を「いづことかいふ。」と問へど、知りたる



人もなし。海士の家のみぞある。

海士の住むその里の名もしらなみの
よするなぎさに宿や借らまし。

丸子川*といふ川を、いと暗くて辿り渡る。今宵は酒匂といふ處に留る。明日は鎌倉に入るべしといふ。（十六夜日記）

一七　月の夜

樋口一葉

村雲すこしあるもよし、なきもよし。磨き立てたるやうなる月の影に、尺八の音の聞えたる、上手ならばいとをかしかるべし。三味も同じこと。琴は西片町*あたりの垣根ごしに聞きたるが、いと良き月に、彈く人の影も見まほしく、物語めきてゆかしかりき。親しき友に別れたる頃の月いと慰めがたうもあるかな。千里の外までと思ひやるに、添ひても行かれぬものなればたゞ羨しうて、これを假の鏡となしたらば人の影もうつるべしやなど、はかなきことさへ思ひ出でらる。

さゝやかなる庭の池水に搖られて見ゆる影、物いふさまにて、手すりめきたる處に寄りて、久しう見入るれば、初は浮きたるやうなりしも次第に底深く、この池の深さいくばくとも測られぬ心地になりて、月はその底のくいと深くに住むらんもののやうに思はれぬ。久しうありて仰ぎ見たるに、空なる月と水の影といづれを眞の形とも思はれず。物狂はしけれど、箱庭に作りたる石一つ水の面にそと取落せば、さゞなみ少し分れて、これにぞ月の影たゞよひぬる。かくはかなきことして見せつれば、甥なる子の小さきが眞

樋口一葉筆蹟

寄歌懐述
敷嶋のうたの
あらすの田すき
かへしむかし
のすがたれ
かみすべき
夏子

丸子川　今の酒匂川。

樋口一葉　名は夏子、東京市の人、文學者、明治二十九年歿、年二十五。

西片町　東京市本郷區。

似て、「姉様のすること我もする。」とて、硯の石いつのほどに持ち出でつらん、「我もお月様碎くなり。」とて、はたと捨てつ。それは亡き兄の物なりしを、身に傳へていと大事に思ひたりしに、はかなきことにて失ひつる、罪得がましきことと思ふ。この池かへさせてなどいへども、いまださながらにてなん。明けぬれば、月は空にかへりて名殘もとゞめぬを、硯はいかさまになりぬらん。夜な〳〵影や待ち取るらんとあはれなり。

嬉しきは月の夜の客人、常はうと〳〵しくなどある人の、心安げに訪ひ寄りたる、男にても嬉しきを、まして女の友のさるべき人ならば、いかばかり嬉しからん。自ら出づるに難からば、文にてもおこせかし。歌よみがましきは憎きものなれど、かゝる夜の一言には、身にしみて思ふ友ともなりぬべし。大路ゆく辻占賣の聲、汽車の笛の遠く響きたるも、何とはなしに魂あくがるゝ心地す。（一葉全集）

一八　正行の母

「*お首がお着きになりました。殿様がお歸りになりました。」今日は尊氏の特使が到着すると聞いて、谷一つあちらまで出迎へに行つてゐた家臣は、慌しくかう知らせました。*夫人は小楠公を眞先に、自らその後に附添ひ、殘る五人の子供を從へて玄關に迎へました。護送の任に當つた世瀨川有隣が、具さに尊氏の口上を傳へる間も、夫人は胸が塞がる心地でした。ぢつと手を突き目を閉ぢて控へてゐる頭腦の底に現れるのは、馬・物具を立派にして威風堂々と出陣した夫の姿でした。

唐櫃に納められた首級を奥の間の上段に安置して、一同は涙ながらに拜しました。冷たく氷りついたやうに見える皮膚の色、睨むやうに細く開いた眼の樣、油の拔けた頭髪の一筋にさへ深い恨を見せて、今にも物をいはうとする恐ろしい相好を拜した時には、誰

*お首　足利尊氏の送り屆けた楠木正成の首。

*夫人　正成の妻。

一人鬼氣に打たれぬものはなく、また誰一人口惜涙にくれぬものはありませんでした。

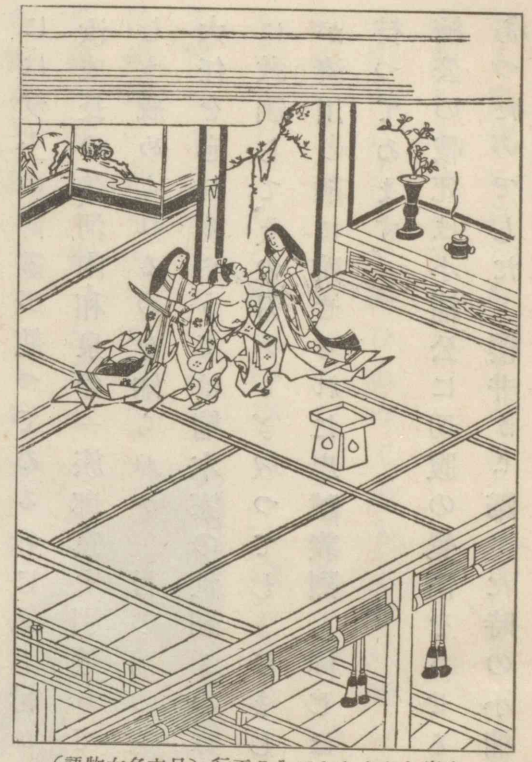
その内に、夫人と對ひあつて最も上座に坐つてゐた小楠公が、何か決心したことでもあるやうに、卒然と身を起して持佛堂へ驅け入りました。その樣子が平生とは違つてゐましたので、夫人も續いて行つて見ますと、小楠公は佛壇の前に坐つて、櫻井の驛で父から貰つた菊水の短刀を引拔き、今しも自害をしようとして、腹を寛げてゐるところでしたから、夫人は驚いて驅け寄つて、刀を持つた小楠公の手

櫻井の驛址

櫻井の驛　攝津國。

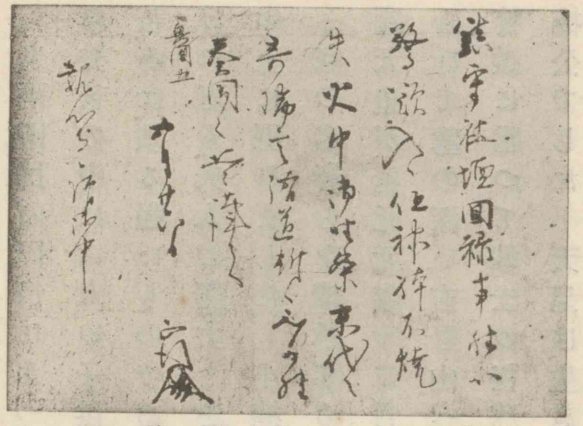
を抑へました。そして、慄ふ聲を押靜めて、「血迷うたか、狂氣したか。幼うても父上の子ぞ。何とてかう思慮ない振舞をするぞ。父上がそなたを櫻井の驛からお歸しなされた御深意を知らぬか。ここで自害せよと仰せられてそのお刀をば下されたか。そのお刀には父上の御靈が籠つてゐるのに氣が付かぬか。父上の御靈が、『汝成長の後、河内・和泉の一族郎黨を引連れて、朝敵を亡ぼせよ。』と、嚴しう戒められるのを知らぬか。目の前の悲みに心亂れて、後々の大任を忘れるやうでは、楠木家の世嗣といはれるものか。」と、涙の中に教訓して、その刀をもぎ取つてしまひました。この教訓は、楠公が湊川の難に殉ぜられた忠誠義烈と同じほどの價値と光輝とを持つてゐます。

楠公の戰死は小楠公に切腹の覺悟をさせるほど絶望的のものであつたのでした。櫻井から歸つた時の小楠公は、飽くまで父の遺



自害しようとしてゐる正行（日本名女物語）

強烈な教訓がなかつたなら、小楠公はこの際死んでしまつたでせう。吉野朝の基礎が楠木家一族の武士的精神によつて置かれたものとするなら、夫人のこの教訓はこの基礎を据ゑ付けた大きな力といつて宜しい。楠公の殘された偉大な精神と、夫人の持つて言を奉ずるつもりで、小さい胸に大きい計畫を持つてゐたのでしたが、父の無慚な首級を見ると、もうそれを守つてゐられぬほど胸が迫つて來たのでした。若し夫人の



楠木正行筆蹟

鎭守社壇回祿事、殊以驚歎入候、但神體不ニ燒失一、火中御坐候條、末代之奇瑞、言語道斷候、念可レ經ニ奏聞一候、恐々謹言

興國五　五月廿六日　正行

觀心寺々僧御中

ゐた剛健な氣象とが融けあつて、小楠公の胸に流れた時、小楠公は強い決心を堅めたのです。普通の婦人では到底堪へることの出來ぬ苦痛と艱難とに夫人は堪へました。夫の最期に遭つては、自分が夫に代るだけの勤をせねばならぬと覺悟しました。家の亡びるのを見ては、己の任務として家名再興の大事を成し遂げねばならぬと決心しました。そして、次々に現れて來る艱苦難澁と戰ひました。

世は足利の掌中に握られました。されども、尊氏は楠公の誠意に同情する

あまり、楠木家の遺族に對つては、そんなに峻烈に搜索の手を擴げなかつたやうに思はれます。しかし、楠木家はどちらかといへば、日蔭の身です、風の音にも心を置く敗殘の一族です。たとひ河内・和泉兩國民の同情によつて無事の日を送つたにしても、一方ならぬ貧苦の中に六人の子供を保護し教養しなければならぬ夫人の苦みは、頗る强いものであつたに違ありません。

けれども、夫人の努力とその胸に漲る慈愛の念とは、小楠公の性格の上に現れました。小楠公は楠木家二世の棟梁として、父の精神と家の名譽とを繼承する大器量を持つやうになりました。後醍醐天皇が、延元元年十二月二十一日、潛かに都の花山院を出でさせられて、雪の深い吉野山へお入りになつた時、かひ〴〵しく鳳輦の警護に當つて武士の任務を盡したのは、まだ元服もしてゐない小楠公でした。天皇は、生き殘る一族郎黨を引具して供奉の列に加

後醍醐天皇　第九十六代。

延元　（一九九六―一九九九）

花山院　京都近衞の南東洞院の西にあつた建物。

はつてゐる小楠公の健氣な樣を御覽になつて、いかに末賴もしくまたお心强く感じられたことでありませう。天皇は吉野山の行宮にお着きになると、父の勳功を思召されて、小楠公を正四位下に敍し、檢非違使左衞門尉に任じ、河內守を兼ねさせることとされました。これは父の官位をそのまゝに下されたのであります。楠公は湊川の露と消えても、小楠公の存在によつて、その凛烈たる忠義の魂は生前の通りに働いてゐます。四十三歲の體軀が十一歲の少童に變つただけで、官位にも、職掌にも、責任にも、地位にも、何の變化もなかつたのであります。（楠公夫人）

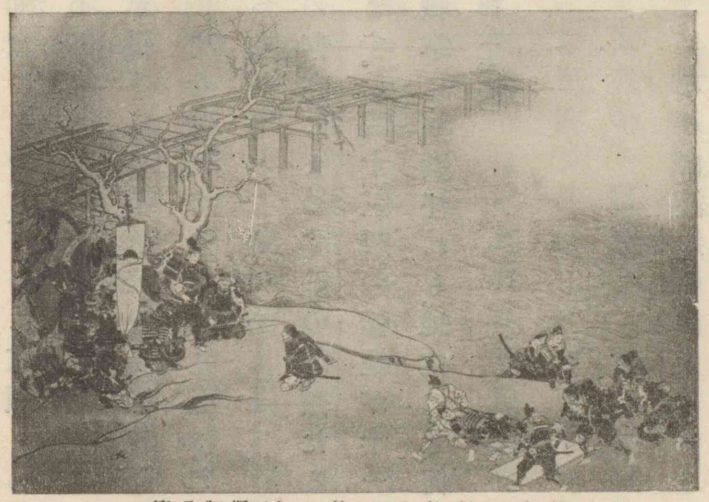
一九　最後の參內

阿部野の合戰は霜月二十六日のことなれば、渡邊の橋よりせき落されて流るゝ兵五百餘人、かひなき命を楠木に助けられて、河より

阿部野　攝津國東成郡天王寺・住吉兩村の間。

霜月　正平二年（一三四七）十一月。

引上げられたれども、秋の霜肉を破り、曉の氷膚に結びて、生くべしとも見えざりけるを、楠木情あるものなりければ、小袖を脱ぎ換へさせて身を溫め、藥を與へて創を療せしむ。かくの如く四五日皆勞はりて、馬に乘るものには馬を引き、物具失へる人には物具を着せて、色代してぞ送りける。されば、敵ながらその情を感ずる人は、今日より後、心を通ぜんことを思ひ、その情を報ぜんとする人は、軈て彼の手に屬して四條縄手の合戰に討死をぞしける。

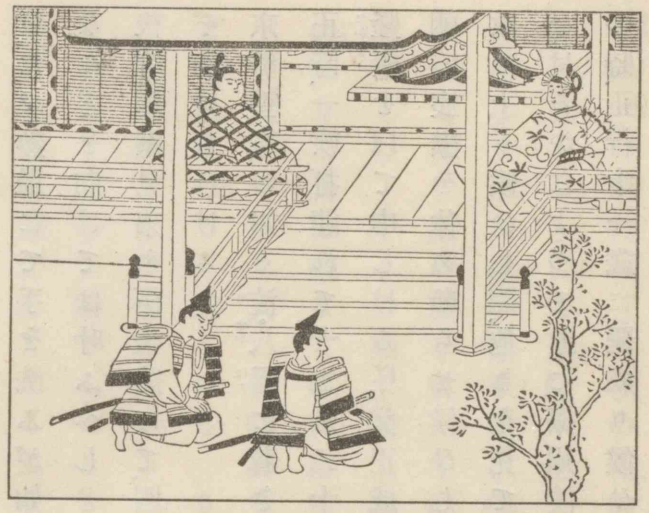


楠木正行敵兵を救ふ（小堀鞆音筆）

さても今年兩度の合戰に、京勢無下に打負けて、畿内多く敵の爲に侵し奪はる。「遠國また蜂起しぬ。」と告げければ、將軍・左兵衛督の周章、たゞ熱湯にて手を洗ふが如し。「今は、末々の源氏、國々の催し勢なんどを向けては叶ふべしとも覺えず。」とて、執事高武藏守師直・越後守師泰兄弟を兩大將にて、四國・中國・東山・東海二十餘箇國の勢をぞ向けられける。

京勢雲霞の如く淀・八幡に着きぬと聞えしかば、楠木帶刀正行・舍弟正時、一族打連れて、十二月二十七日吉野の皇居に參じ、四條中納言隆資を以て申しけるは、「父正成、尪弱の身を以て大敵の威を碎き、先朝の宸襟を休め參らせ候ひし後、天下程なく亂れて、逆臣西國より攻め上り候ひし間、危きを見て命を致すところ、豫ねて思ひ定め候ひけるかによつて、遂に攝州湊川にして討死仕り候ひ了んぬ。その時、正行十一歳に罷成り候ひしを、合戰の場へは伴なはで、河内へ

兩度の合戰　河内國譽田林の戰と攝津國阿部野の戰。
將軍　足利尊氏。
左兵衛督　足利直義。
淀・八幡　ともに山城國、京都の西南方にある。
先朝　後醍醐天皇。
討死　延元元年五月十七日。

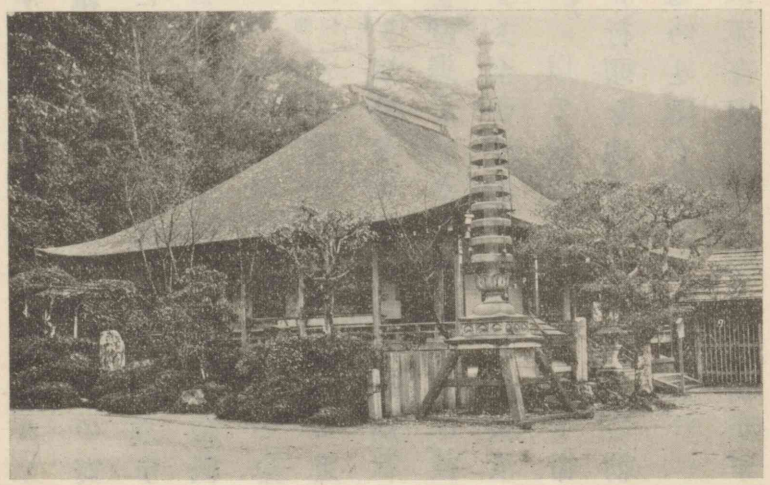


楠木正行の參内（太平記）

歸し、『死に殘り候はんずる一族を扶持し、朝敵を亡ぼし、君を御代に即け參らせよ。』と申し置きて死にて候。然るに、正行・正時已に壯年に及び候ひぬ。この度我と手を碎き合戰を仕り候はずば、且は亡父の申しし遺言に違ひ、且は武略の言甲斐なき謗に落つべく覺え候。有待の身思ふに任せぬ習にて、病に犯されて早世仕ること候ひなば、たゞ君の御爲には不忠の臣となり、父の爲には不孝の子となるべきにて候間、今度師直・師泰にかけ合ひ、身命を盡し合戰仕つて、彼等が頭を正行が手にかけて

取り候か、正行・正時が首を彼等に取られ候か、その二つの中に戰の雌雄を決すべきにて候へば、今生にて今一度君の龍顏を拜し奉らん爲に參内仕つて候。」と申しもあへず、涙を鎧の袖に懸けて、義心その氣色に顯れければ、傳奏未だ奏せざる先に、まづ直衣の袖をぞ濡らされける。

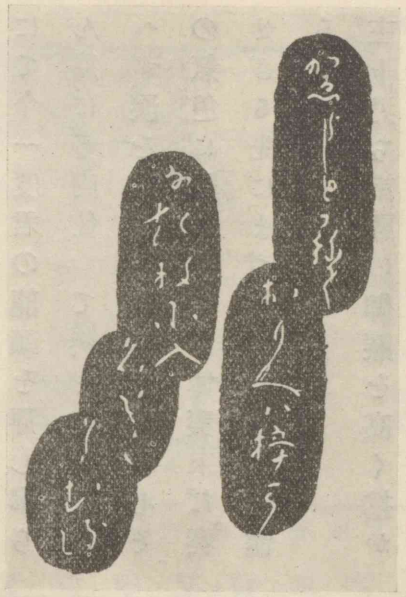
*主上乃ち南殿の御簾を高く捲かせて、玉顏殊に麗しく、諸卒を照臨あつて、正行を近く召して、「以前兩度の戰に勝つことを得て、敵軍の



如意輪堂

主上　後村上天皇。

氣を屈せしむ。叡慮まづ憤を慰する條、累代の武功かへすがへすも神妙なり。大敵今勢を盡して向ふなれば、今度の合戰天下の安否たるべし。進退度に當り、變化機に應ずることは、勇士の心とするところなれば、今度の合戰命を下すべきにあらずといへども、進むべきを知つて進むは、時を失はざらんが爲なり、退くべきを見て退くは、後を全うせんが爲なり。朕汝を以て股肱とす。愼んで命を全うすべし。」と仰せ出されければ、正行頭を地に附け、とかくの勅答に及ばず、たゞこれを最後の參内なりと思ひ定めて退出す。正行・正時・和田新發意・舍弟新兵衞以下、今度の軍に一足も引かず一



楠木正行筆蹟

處にて討死せんと約束したりける兵百四十三人、先皇の御廟に參りて、今度の軍難儀ならば討死仕るべき暇を申して、如意輪堂の壁板に、各名字を過去帳に書き列ねて、その奥に、

かへらじとかねて思へば梓弓、
なき數にいる名をぞとゞむる。

と一首の歌を書き留め、逆修の爲と覺しくて、各鬢の髮を切りて佛殿に投げ入れ、その日吉野を打出でて、敵陣へとぞ向ひける。（太平記）

二〇　長慶天皇

芝葛盛

今から五百四五十年の昔、我が國には、吉野朝廷の外に、足利氏の擁立した天皇が京都にましゝたので、天下は二つに分れ、戰亂が續いてゐました。吉野朝廷は常に勤王の士によつて護られてゐましたが、柱石の臣も漸く倒れ、南風はとかく振ひませんでしたとこ

芝葛盛　東京府の人、明治十三年生、歴史家、宮内省編修官。

ろへ、*正平二十三年三月十一日、*後村上天皇がお崩れになりました。そして、その後を承けて御位に即かせられたのが長慶天皇であります。

長慶天皇は後村上天皇の第一皇子で、御名を寛成親王と申し、*興國四年に御誕生になりました。天皇は御年二十六歳の時、御父帝が河内國住吉の行宮でお崩れになつた後を嗣いで御即位になりましたが、翌正平二十四年大和國吉野に御座を遷され、次いで河内國天野の金剛寺にお遷りになりました。所が、*文中二年八月、足利方の細川氏春・赤松範資などが攻めて來ましたので、また難を避けて吉野に行幸せられました。そして、*弘和三年、御年四十一歳、在位十六年で、御位を皇太弟後龜山天皇にお譲りになりました。

長慶天皇は御譲位後も太上天皇として軍務を統べさせられ、翌々*元中二年には、高野山の丹生明神に戰捷を御祈願遊ばされて、宸筆

正平（一三〇六—一三〇九）後村上天皇第九十七代。

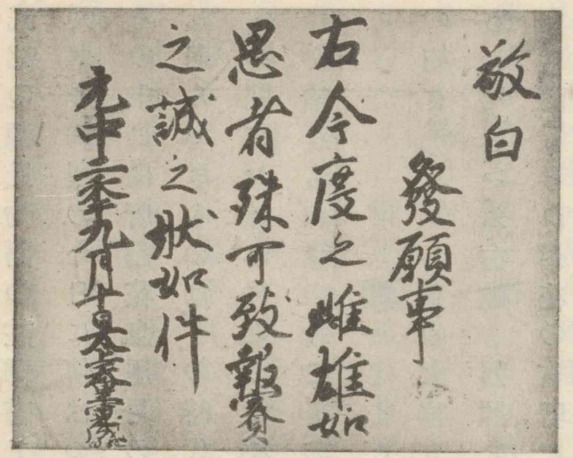
興國（一三四〇—一三四五）

文中（一三七二—一三七四）

弘和（一三八一—一三八四）

元中（一三八四—一三八七）

の御願文を納められました。この御願文は現今高野山の*金剛峰寺に遺つてゐますが、その立派な御筆蹟を拜しましても、天皇が英邁な君主であらせられたことが想像されます。



長慶天皇宸筆

天皇はかやうに軍國の政に御多忙な歳月をお過しになりましたが、一面には文學の御趣味が深く、屢〻和歌の會を催され、御自らも千首の歌をお詠みになりました。天皇の御叔父に當らせられる*宗良親王が「新葉和歌集」をお撰びになつたのは、實に天皇の勅命によられたのでありました。また天皇は「仙源鈔」といふ御著述を遊ばされましたが、これは紫

金剛峰寺　眞言宗古義派の總本山、僧空海の創建。

敬白
發願事
右今度之雌雄如思者、殊可致報賽之誠之狀如件
元中二年九月十日
太上天皇寛成敬白

宗良親王　後醍醐天皇の皇子、法名は尊澄、天台座主、後還俗して吉野朝廷のために盡された。

式部の源氏物語の註釋書であります。天皇の御製の今日に傳はつてゐるものは三百首に上つてゐます。その中には、所謂花鳥風月の御作も少くはありませんが、特に注意し奉るべきものは、その時代を背景とした特殊の御閲歴と御境遇との間にお詠みになつた感懷の御作であります。

治まらぬ世の人ごとのしげければ、
櫻かざして暮らす日もなし。

の如きは、「もゝしきの大宮人はいとまあれや、櫻かざしてけふも暮らしつ。」といふ古歌と對照して、誰か感慨を禁ずることが出來ませう。而もそれが花の吉野にまし〳〵ての御作と思ふと、その感じも一入深いではありませんか。

わが宿と賴まずながら吉野山、
花になれぬる春もいくとせ。

もゝしきの　山部赤人の歌、新古今集にある。

久方の天の岩戸を出でし日や、
かはらぬかげに世を照らすらん。

我が日の本の天つ日嗣をつがせられた大君が、吉野の片田舍に侘しく世を送り給ふ御身として、「かはらぬかげに世を照らすらん。」と仰せられたのを聞いては、當時誰か勤王の心を起さないで居られましたらうか。

このやうに御不運であらせられた天皇の御事蹟が今日まで埋れて、その御在位さへも不明であつたことは、誠に恐れ多いことでありました。これは吉野朝廷が常に北軍に壓迫されて、畏くも御座を轉々として遷されたことや、吉野朝廷の御事蹟を語り傳へた書物が遺つてゐなかつたためでありました。併し、新しい史料も發見され、また歴史の學問も進んで來ましたため、この天皇の御在位が立派に證明されて、御歴代に加へさせられることになつたので

あります。即ち長慶天皇を第九十八代の天皇として仰ぎ奉ることになつたのであります。久しく叢雲に掩はれてゐた天つ日影を再び仰ぎ見ることが出來るやうになつたのは我等國民一同の喜びに堪へないことであります。

なほ長慶天皇が御一人御歴代に加はらせられても、紀元年數が十六年伸びるのではなくて、後亀山天皇の御在位年數が減じたのであることを、念のため申し添へて置きます。

自修文

二一　正月前

沼波瓊音

十二月の半ば頃の或日の午後、大橋の家での出來事でした。八歳になる道子は、子供部屋で、お友達のK子さんとM子さんと盛に雙六に興じてゐました。

沼波瓊音　名は武夫、名古屋市の人、俳人、昭和二年歿、年五十一。

興ずたのしむ。

この話を讀む方は、大橋の家が貧乏で、親も子も着たきり雀だといふことを承知してゐて下さい。そして、彼の子供達の行つてゐる學校は、可なり豊かな家の子が多く、着物など殊に近頃伊達を競ふといふやうな傾向があるといふことも承知してゐて下さい。

彼の妻の春枝は茶の間で針仕事をしてゐました。道子の姉の十一歳になる文子は、部屋を雙六で占領されたので、客間へ來て、宿題をしてゐました。大橋は例の通り書齋で書き物をしてゐました。家中しんとして、たゞ雙六をやつてゐる子供達の聲ばかり賑かに聞えてゐました。

その内、K子さんが調子高な聲で、

「あたし、お正月が來るのが樂みだわ。式にはネ、あたし洋服だけれどもネ、御年始には、縮緬の長い袂の着物を着てネ、おたてに帶を結んでネ、卵色の扱帶を締めてネ、あたしのネ、あの、ほら、自分の

着たきり雀　現に着てゐるだけしか着物を有たぬこと。

伊達　はで。

名前をちやんと刷つたネ、名刺を持つて、あたしが自分で廻るのよ。うちでネ――この四音をハ調4456といふ工合にいつて――羽根をつく時にはネ、博多の帯の方を結ぶのよ。」

すると、M子さんの聲で、

「わたしだつて、縮緬の長い袂の着物を着るのよ。だつて、わたし洋服なんか着ないわ。わたし、學校がお休みになるとネ、お母さんと三越に行つて、函迫を買つていたゞくのよ。御大典

函迫　婦人の懐に挾み持つ一種の紙入。

模様の函迫なの。そち、八千代つて煙草があるでせう。あゝいふ繪を一杯に刺繍つたのよ。さうしてネ、あなた、鎖は銀なの、ほんとの銀ですつて。」

さあ、道子がどうしても何か着物のことをいはねばならない順番になつた。何といふだらう。さつきから默つてゐるが、困つてゐるんだらうか、平氣でゐるんだらうか、「わたしも縮緬の着物を着るの。」などと、嘘を吐きやあしないだらうかと、さつきから宿題の鉛筆を休めて聽いてゐた文子は、一所懸命に耳を敲てました。大人でいふと、今、道子は我等を代表して公衆の前に立つてゐるのである。道子はいかなる言を吐いて、我等の威嚴を護らうとするかと、期待する心持で、非常に緊張して耳を敲てたのでした。春枝も仕事をしながら、どういふだらうと、息を凝らしてゐました。

この間ちよつと聲が途切れて、

期待　まちまうける。
緊張　ひきしまる、はりつめる。

「早くおしなさいよ。」

道子は無造作にかういひました。K子さんとM子さんの心が、はつと雙六に歸つた樣が、聽いてゐた人々の目に見えるやうでした。

K「あら、あなたの番ぢやあないの。」

M「あら、いやだ。」

三人「はゝゝゝゝ。」

かうしてまた「一イ二ウ三イ四オ。」とか「お休み。」とか「上つたわ。」とか、もとの雙六の話になつて進行して行きました。

この「早くおしなさいよ。」の聲を聞いた時、文子は母の所へ飛んで行つて、兩肩をきゆつとすぼめ、母の顏の前へ自分の顏を突き出して、思ふさま笑ひました。その時、母も疊を平手で打つて笑ひました。

大橋もおのづと腰が浮いて、茶の間へのそ〳〵と出て來て、立つたまゝ春枝と文子とを見下して、にた〳〵としました。

無造作　手輕なこと。

この時、この三人の心には、道子に對する一種たまらない喝采のやうなものが湧き立つてゐました。（凡人に聽け）

二二　初日の出

服部嘉香

空に大きな春が來た。
「時」は今靜かに歩みを始めた、
「追憶」の後姿を見送りながら、
空は高く大きく笑ひ歌ふ。
見よ、かなた、雄々しき初日の出。

地に懷かしい春が來た。
人々は今靜かに目覺め、
團欒の美しい色どりに

喝采　ほめたてること。

服部嘉香　東京市の人、明治十九年生、詩人、關西大學教授。

溢れわたる歡びの聲に醉ふ。
見よ、家々の軒に翻く日章旗。

二三　新年葉書

横山健堂

新年に新年葉書を點檢すれば一種の興味あり。近時新年に名刺を郵送すること流行す。名刺は訪問に換ふるの意、葉書に比すれば一層緊切なるが如く、葉書よりもその手數と郵税との繁なるを以てして、敬意を表することもまた一層鄭重を加ふるの形なきにあらず。然れども、趣味は名刺よりも葉書にあり。蓋し新年の郵便に於ける封送の名刺は訪問の意を表せども、叩扉の音を聞きてその人を見ざるが如く、夜水雞を聞くの思なきにしもあらず。葉書はその面を見ずと雖も、簾を隔てて相語るが如く、心胸・面目我が眼前に躍如たらずんばあらず。

横山健堂、名は達三、山口縣の人、明治五年生、文章家。

古より「謦欬に接す。」といふ語あり。葉書は、その本來の効用は、單に謦欬に接するのみの感想に過ぎざるものなり。殊に未知の人より始めて一片の葉書を得たる時は、汽車中にて偶然隣客と數語を交換せし思をなすに止まるべし。

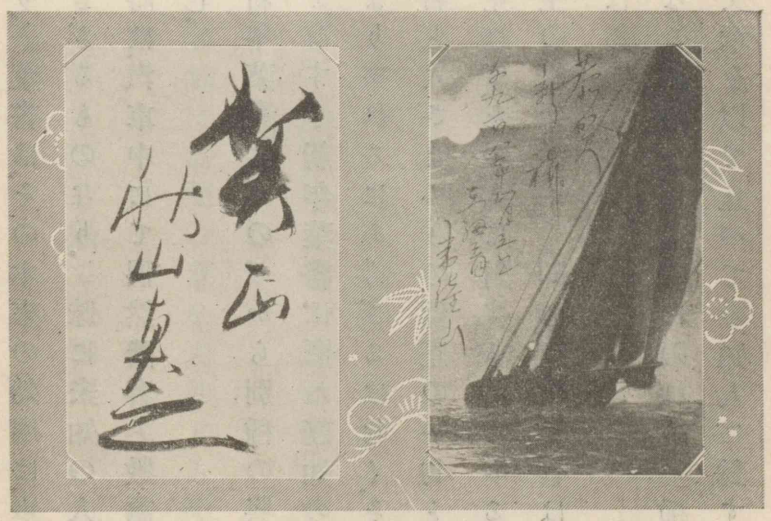
横山健堂

新年葉書はおのづから別種の興味を有す。新年葉書は概ね既知の人より來れるにあらざるはなく、その名と人さまざまの賀正の一句とを見れば、その人に對するあらゆる平生の感想湧く。即ち新年葉書はその人を象徴するものならずんばあらず。

新年葉書の他の往復書信と異なる所以は、知人間に限れる一種の公開狀なるにあり、たゞ一樣の文章を以て凡べての知人に對する

にあり。而してこれを接手する知人は、千差萬別の情緒を以てこの一樣の文章に對するなるべし。

這般の意義よりすれば、新年葉書は力めて意匠を凝らし、以て自家の性格と趣味とを表現せんことを要す。表現の鮮明なればなるほど、受信者の享受する感動は益痛切なるを致すべし。故に新年葉書は筆墨の巧拙を問ふにあらざるを以て、他人にその意匠を託するは斷じて不可なり。



常陸山の年賀狀　　秋山眞之の年賀狀

恭賀新禧
千九百八年
正月元旦
在紐育
常陸山

賀正
秋山眞之

岩倉具定夫妻の年賀狀　　跡見花蹊の年賀狀

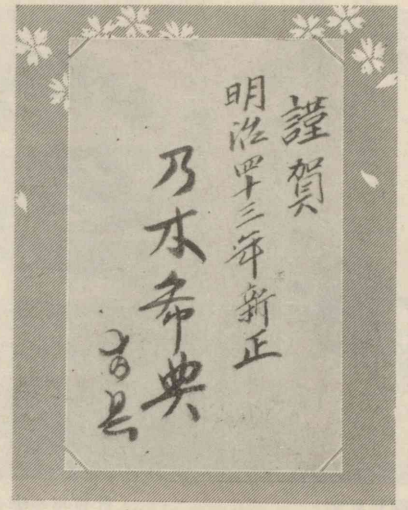
他人に託して意匠を凝らせる新年葉書は、必ずしも不可なりといふにはあらず。その巧妙なるものは、新春屠蘇の前に一粲を博するに足るべし。他人の意匠なりといふとも、又これ本人の趣味を表現せるものたるを失はず。然れども、此の如きは、到底言に訥なるもの、他の辯に雄なるものを傭ひ來りて、己に代りて新年の辭を述べしむるが如きのみ。代演はたとひ絶妙なりとも、訥辯なる本

恭賀新年
一月元旦
岩倉具定
岩倉久子

花蹊
新年のことほぎまをし上候
四十年元旦

人の自らいふの情味あるに若かず。

人去り燈孤にして、火鉢の活火ひとり生氣を縱にす。この時席を拂つて茶を喫み、案頭の新年葉書を檢し來れば、知人の面目畫くが如く、一々我が眼前にあり。その人と靜境に細語しつゝあるにも似て、情緒纒綿として盡きず。



乃木希典の年賀狀

新年葉書は「謹賀新年」の四字を以て最も普通なるものとす。或は更に簡明を求めて、約して「賀正」の二字となせるものもあり。而して多數の人の口頭の賀詞の一致するが如く、葉書に於てもこの四字或は二字を用ふるを普通とす。

新年葉書は、その實用よりすれば、たゞ新年の意味を適切に發表す

謹賀
明治四十三年
新正
乃木希典
拜具

○乃木希典の年賀狀の中「謹賀明治四十三年新正」は代筆である。

るを得ば足れりとすべし。「謹賀新年」・「賀正」の四字・二字は、正にこの意義に適應するものなり。されど新年の賀客同じく賀正の一語を述ぶるも、その服裝の一樣ならず、脫帽・叩頭の一動・一線に至るまで萬人萬樣なると等しく、僅々這般の四字・二字を手書するも、なほその書風・字體等に多少の異同なき能はず。またとひ印刷すればとて、活字の大小・異同、インキの色彩、種々樣々の變化あるを見るなり。

今、年賀狀といへば、その多數は新年葉書なるを常とし、書面となせるは甚だ稀なり。世務愈繁にして、禮意益簡に流る。名刺を封送するは鄭重の趣意に出でたるなるべけれども、簡を求めて已まざるものもまた名刺を封送す。その簡の窮まれるものは、單に普通名刺を郵送し來れるもあり。幸に新春の時機に來れるを以て、受くるもの以て賀正の意なりと解釋せざるはあらず。この場合に

於て、この普通名刺は最も解り易き一種の謎たるを失はず。禮は簡を嫌はず、意の深きを貴ぶ。賀正の文はいかに短きも差支なし。たゞ紙面字畫凡べて整齊なるを要すること、禮服は絹衣のだらしなきよりも、木綿のきちんとしたるを心地よしとするが如くならざるべからず。

新年の禮裝の上に人格・趣味の表現せらるゝと同じく、新年葉書の表にその人格・趣味・素養・漢學的・ハイカラ的・蠻カラ的、凡べて流露せざるはなし。（人物と事業）

二四　手紙雜感

三宅やす子

人は言葉なしには生き難いが、言葉は何時でも口から耳へばかり傳へる事が出來るとは限らない。此の場合、手紙が言葉に代つて私達の意志を明瞭に表示して相手に傳へてくれるのは、心強い事

三宅やす子　故理學博士三宅恆方の妻、京都市の人、明治二十三年生、著述家。

である。

若し手紙が無かつたら……。單に斯う考へるだけでも寂しい心持になる。

考へて見るがいゝ。細かい文字で認められた手紙は、其の封筒の宛名に從つて、ポスト（Post）から郵便局へ、郵便局から汽車の中に積み込まれる。そして、山の間、隧道の中、人は退屈すると云ふ長い時を汽車に搖られて、人が旅をする代りに速に旅をして用を話してくれるではないか。

其の手紙を見た相手は、其の文字によつて、書いた人の顏をありありと心に描き出し、其の聲を聞くやうな心持になり、そして、にこやかに話しかけるやうな氣分で返事を認める。其の返事は來た時のと同じ道を通つて遙々と此方へ訪れて來る。

手紙は其の時〳〵の心の記念である。或時に或事を斯う述べたといふ正しい記錄である。

ともかく私達は「手紙」といふ言葉を耳にする時、そこに言ひ知れない多樣の感じを起す。何とも言へない一種の懷かしみを持つて、心の底にまで觸れて行く或物を感ずる。

片假名を習ひ覺えて「ヲバサン、ゴキゲンヨウ。」と書き初める頃から、成長して世に生きて行く間に、私達は幾千通・幾萬通の手紙を讀み且認める事だらう。

そして、其の認めた筆の跡は、多くは棄てられるものではあるが、若しそれが殘して置かれたら、其の墨の跡、インキの字劃は、恐らく其の人が世を去つた後、何年でも何十年でも消えないでゐて、讀む人の心に或感想を起させる事だらう。

私達は、紙魚の食つた日本紙に細かく書かれた墨の跡を、祖父の、大

祖父のと、折々記念に見せられる事がある。何々何年亥の何日、そんな昔の〳〵事が記されてあればこそ、それが殘つて傳はるのである。

まだ見ぬ父母・祖父母の面影を手紙によつて想像する人も少くはあるまい。幼い時に別れた親の情深い記憶は夢ほどもない人が、年が長じて親の手紙を見出して、親はこんなにも慈愛の眼で自分を見てゐたのかと涙ぐませられる事のあるのも、手紙の活きた力だらう。

三宅やすや子

「手紙。」繰返して言ふ、それは何と云ふ魅力を持つものだらう。「若し手紙が無い世だつたら。」私はそれを考へるだけでも悲しくなつて了ふ。

手紙を一々保存して置く人がある。さうかと思ふと、返事を出して了つたものは、さつさと破つて棄てて了ふ人がある。久しい間澤山溜めて置いて、あとで一束にして燒いて、感傷的の氣分を味はふ人がある。何處にでも置き散らし、時には書物の間などに挾んだまゝ他人に貸して、つまらない內輪話を關係のない人に見られる人がある。

づつと幼い時に通つてゐた學校の仲のよい友達と別れる時、「東京に行つてもお手紙を頂戴。」「きつと。」と約束をすると、別れる悲しさよりも、早く別れて了つて手紙が貰ひたかつた。「一寸あの事。」「何、手紙？」「えゝ、手紙。」「はゝゝゝゝ。」「はゝゝゝゝ。」二人は轉げるばかりに笑ひ合つた。何となくきまりが惡いやうな、樂しいやうな、譯

の分らない氣持だつた。

親しい友達に別れて、言葉の違ふ人達の中に交るやうになつた時、私はすぐに其の友達に手紙を出した。友達からは折返し返事が來た。「とう〳〵來た。」私は能く知り拔いて居る其の友達の住所を繰返して讀んで見たりした。私は又手紙を出した。返事はすぐに來た。

やがて物足りなくなつた。手紙を出せば返事が來る。併し、返事の外は先方から手紙をよこさない。

そして、手紙の往復は十日に一　が一月に一度となり、二月に一度が半年に二度となつた。

しまひには、人の傳言で其の友達の動靜を知るやうになり、今では傳言する人も傳言すべき場所さへも知らない。

只始めて手紙を遣り取りしたあの時の胸の轟く思、「親友だ。」と意識

しようとした子供らしい喜は、何時までも消え去らない。

或人が言つた。「母が亡くなつた時、早く亡くなつた父の手紙の束が澤山出て來ました。それを讀んで、父がどんなに私を愛してゐてくれたかと云ふ事を知りました。父や母の苦勞も分りました。なぜ母はもつと早くあの手紙を私に見せてくれなかつたのでせう。母は私には默つて其の手紙の大きな束を行李の底に仕舞つて置いたのでした。何の爲に殘して置いたのか知りませんけれども、古びた、所々蟲の食つた紙が、かうして何時までも殘つて居るのに、其の手紙を書いた人も、仕舞つて置いた人も、皆地に還つたのだと思ふと、あつけなくて、私は讀んで了ふとすぐに燃やしました。燃やして了つたら、急に泣けて〳〵仕方がありませんでした。」

手紙が澤山一緒に來た時、一番好きな人のを一番後に讀むと云ふ人があり、又それを一番先に讀むと云ふ人もある。何れも人間の心持の現れである。同時に、それは手紙の持つ大きな力である、表情である、心と心との限りのない交響である。

言ひたい事が澤山重なると、どうしても手紙が書けなくなる。それは心持の方が強く動いて、字で表す事に不滿を感じるからだらう。それと同時に、餘り手紙を書くことに得手でない人は、どうしても筆無精になり易い。逢へば親しさうに物を言ふ人が、別れて居ると何時まで經つても便りをよこさなかつたりするのは、此の例である。（アルス婦人講座）

二五　四時の變遷と女子

大町桂月

大町桂月、名は芳衛、高知縣の人、文章家、大正十四年歿、年五十七。

「*一榮一落これ春秋。」といひけん。暑往き寒來るは天の道なり。壯なるものは老い、盛なるものは衰ふ。人の身の上もまた陰陽消長の理には洩れず。女子一生の經歷、殊に四時の變遷に似たるを感ずるなり。

春は天地の少女なり。少女は人生の春なり。東風そよ〳〵と吹くまゝに、結びし氷解けて、溪水潺湲（せんくわん）たる聲を發して流るゝは、嬰兒の搖籃の中に始めて日の光を仰ぎて、呱々たる聲を放ちて乳を求むるに喩ふべし。燒野の上に萌え初めたる蕨の芽の纖柔なるは、嬰兒の手足の纖柔なるに彷彿たり。やがて咲き出づる花の色は、少女子の匂へる俤を寫し、枝より枝に飛び交（か）ひて囀る鶯の聲は、少女子の謠ふ節に象（かたど）れり。されば、人々白妙の袖振りはへて、野に山に春の景色を尋ねて、ひねもす打興ずるが如く、少女の可憐にしてやう〳〵およずくるを見ては、世の辛苦に窶れし父母も慰められ

*一榮一落（レクノ）驛長勿（レ）驚時變改、一榮一落（レ）是春秋。（菅原道眞）

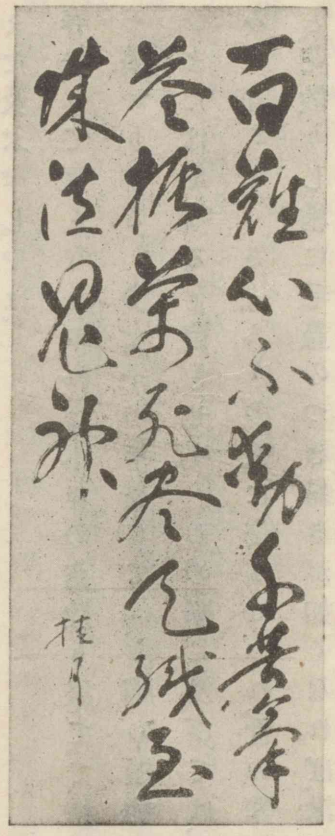
て、心おのづから長閑かなるべし。げに春は樂しき時候なり、少年は樂しき時代なり。されど、徒に花鳥に浮されて、田の面を鋤き返しつゝ種子を下すことを怠りなば、秋の收穫は得られざらん。盛*年は重ねて來らず、時に及びて勉强せずして、老いて臍を嚙むともまた及ぶべしやは。

春去りて夏となりぬれば、木々の花散り果てて、梢には綠の葉のみぞ繁かりける。少女子の年長じては、友禪の振袖を脫ぎ換へて裝ひ、またはでなるを旨とせず。この際に及びては、父母の膝下にのみは在らず。さま〴〵の人に交るにつれ、世の弊風に染み易きこと、花散りし梢に毛蟲のつき易きが如くなれば、深く愼みて、白*絲・岐路の歎を免るべきなり。かくて年益長じて、人の家に嫁すれば、姑に仕へ、夫に仕へ、小姑に交り、婢僕を使ふなど、身の務彌增すにつれて、心の苦み彌增しに增すは、なほ夏深くなるにつれ、暑さ烈しく、蚤・

盛年は重來（ネナラ）ニ（シ）ビ（テ）ヲ（リ）ニ、一日難ニ再晨（ビヲ）ニ、及（ビ）レ時當ニ勉（タ）ハ（ス）ベ、歲月不（ラ）レ待（ル）人。（陶淵明）

白絲・岐路　墨子は白練絲を見て泣き、楊子は岐路を見て歎いた故事。

蚊など多くなりて、安らかに眠ることを得ざるが如く、春の樂しきに引換へて、心苦しきことといふべくもあらず。時には人知らぬ涙を抑ふることもあるべく、また時には恨を子規に寄せて血を吐く思もあらん。



大町桂月筆蹟

百雜心不レ動、千苦氣益振、萬死盡ニ天職一、至誠泣ニ鬼神一　桂月

秋の初になりぬれば、今年も半ばは過ぎしなり。我がよ更け行く月影は、いとゞ哀を添ふれども、暑さ消えて、朝夕の風涼しく、起居いと安くなりぬるは、女の身の數多の苦みを嘗めて、人の心の賴みがたきを悟り、巧みに世に處する法を覺えて、また苦しとも思はざるに似たり。やがて西吹く風身に浸みて、蟲の聲々あはれなるも、しかすがに七草の花、春の花にも增して一種可憐の趣あり。女の身もまた色香やゝ失せぬれど、禮節に嫻ひて、よろづまめやかなる風姿は、少女にも優りて尊きを覺ゆるなり。かくて五穀果實など全く熟したれば、收穫終りて、百姓ども皆太平樂を謠ひ、和氣洋々として鎭守の森に溢るゝは、玉の如き男子、花の如き娘ども、幾たりとなくやゝ安らかに生みて、一家團欒の中に無量の快樂自ら生ずるが如く、心にかゝる浮雲晴れて、願望の月いとゞ圓かなるべし。

秋往いて冬の初になれば、小春日和麗しく、長閑かなること春にも劣らず。鳥の聲々滑かにして、龍田川邊に錦流るゝ有樣は、年老いて世累なくなり、數多の子ども皆膝のほとりに集りて、反哺の孝を盡すによりて、老母の心の閑かにして樂しくなりたるにも譬へつ

秋の初になりぬれば、今年の半ばは過ぎにけり、我がよふけゆく月影の、傾くこそ哀れなれ。（慈鎭）

龍田川　大和國生駒川の下流、南流して大和川となる。

べし。科戸の風烈しく吹きまさるまゝに、木の葉散り果てて、滿園皆枯木となりて、いとゞ寂しくなりぬるは、齒落ち、目窪み、腰は梓の弓と曲り、額の皺は齡の數とともに添ひ、形容枯槁して、見る影もなくなれる人の身の上に異ならず。かくて寒さ愈〻募り、山川草木悉く白雪の中に埋れて、一年空しくこゝに終る。人の齡もまた愈加はり、白髮雪と相映じて、いとゞ凄じく、遂に無常の風に誘はれて、一命窮陰とともに空しくなりぬべし。

觀ずれば、四時自然の理、春あれば秋あり、人間必須の勢、生あれば又死なきを得ず。迷へば南山の齡も短く、悟れば蜉蝣の一期も長し。人生夢と見るもはた眞と見るも、一に人の心の如何にあり。天地自然の變遷を解するものにして、始めて共に人生のことを語るべきなり　（天絃小絃）

南山の齡　南山は支那の終南山をいふ、長壽を祝する辭。

二六　婦人と文學的教養

本間久雄

文學藝術に對する教養の程度は、直ちにその人の人間としての價値を示すものです。言葉を換へていへば、その人がいかほど文學藝術を愛好し理解してゐるかといふことによつて、その人がいかほど高尚な人であり、いかほど人間としての味はひの豐かな生活を送つてゐる人であるかが解るのです。實際の事實について見ても、文學藝術の愛好者には、どことなく品があります、どことなく人間として精練されたところがあります、手觸りが柔かで、どことなく深みがあります。といふのは、文學藝術を理解することによつて、その人は人生そのものを理解し味はつてゐるからです。これに比べると、どんなに立派な着物を着てゐようが、どんなに富を持つてゐようが、文學藝術の理解を持たない人はどこか下品です、すべてが物質的で、手觸りが堅く、人間としての情味

本間久雄　米澤市の人、明治十九年生、早稻田大學教授。

を缺いてゐます、つまり一種蠻的な感じを人に與へます。西洋でも、心ある人は最近頻りに高雅な教養といふことが、人間にとつて最も大切な條件であると說いてゐます。高雅な教養とは、上品で、風雅で、人生に對する理解があり同情があるといふことですが、これは確かに人間にとつて最も大切な條件であるに違ありません。この意味から、文學・藝術に對するその人の理解と愛好とは、直ちにその人の人格を象徵してゐるといふべきです。そして、これは婦人の場合に於ても無論眞理であり、同時に文學・藝術の理解と愛好とは、婦人の教養に於て一層重大なものとなる譯です。

右の事實は、單に一個人の場合に於てばかりでなく、一國の場合に於ても同じです。つまり、文學・藝術の如何によつて、その國のその時代の文化または文運のいかなるものである

本間久雄自署

かを容易に知ることが出來るのです。この意味で、文學・藝術は一國文運の華であると同時に、その國の文明を批判する唯一の標準であるといふべきです。これは古今東西の歷史のよく證明するところであることはいふまでもありません。

或一つの國で、文學・藝術の盛な時代は、その國の文運の最も盛な時代です。そして、婦人が文學・藝術の旺盛に與つて力のある場合には、婦人が思想的にも感情的にも社會的にも十分に認められてゐる時代です。これもまた古今東西の歷史のよく證明するところです。

試みに例を我が國に取りますと、かの平安朝時代の如きがそれです。即ちこの時代は、婦人も男子と同じく、思想的にも感情的にも乃至社會的にも、人間としての權利を主張し得た時代です。紫式部・清少納言・和泉式部等の閨秀作家が輩出したこの時代は、單に我

が國に於てばかりでなく、婦人運動の立場から見れば、世界の歴史に於て屈指の黄金時代だつたのです。「文明と婦人氣質」といふ書物を著してゐる*ブラッドベリーといふ人は、平安朝時代を以て婦人運動の立場から黄金時代であると解釋してゐる一人です。實際この平安朝時代は、婦人の位置が非常に高かつた時代です、婦人が非常に尊重された時代です。またこの時代は、今日世界の問題になつてゐる婦人の經濟的獨立といふことも立派に實現されてゐた時代です、思想的にも物質的にも、男女が一切同權だつた時代です。それが武家政治になつて、武力が最上のものと崇められてから、婦人はいつの間にか男子に隷屬するものとなり、その結果、思想的にも物質的にも、婦人の位置が男子に比して非常に低級なものとなつたのです。

私は、婦人運動の立場から、思想的にも物質的にも、男女が同權だつ

*ブラッドベリー　Bradbury　米國の人。

た平安朝時代を憧憬すると同時に、その時代の婦人が文學・藝術を愛好し理解したことを考へて、文化と婦人の文藝愛好との間には、切つても切れぬ關係のあることを今更のやうに感じないではゐられません。（現代の婦人問題）

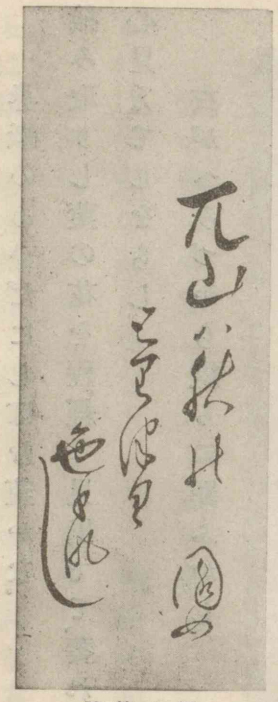
坪内逍遙

二七　女流の俳諧

徳川時代には、女流にして俳諧を能くせしもの少からざりき。千代女・園女・すて女・智月・秋色（しうしき）及び花讃などあり。何れも同じ頃の人なり。

園女の句に、

忙しや堇を摘めばつくづくし。



園女筆蹟

坪内逍遙　名は雄藏、名古屋市の人、安政六年生、文學博士。

兀山は秋のとりつく色もなし　園女

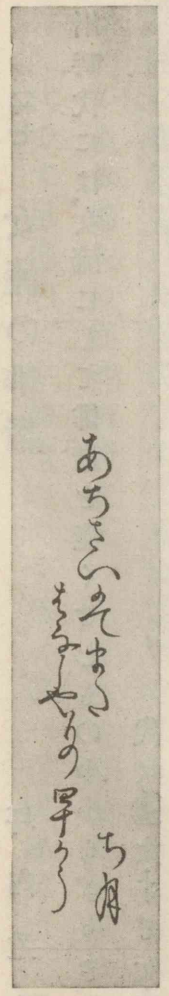
園女　岡西惟中の妻、伊勢國の人、享保十一年（一七二六）歿、年六十三（或は七十四ともいふ）

春の野遊のさま見るやうなり。

鼻紙のあひだにしぼむ菫かな。

摘み取りし菫の花を程經て見出でて、萎れたるをも捨てかぬる女心見えてしをらし。

衣がへみづから織らぬ罪ふかし。



智月筆蹟

春となり秋と移るにつけても、母の恩の深きを思ふ心根の殊勝なるを見るべし。

負うた子に髪なぶらるゝ暑さかな。

汗の流るゝいと暑苦しき夏の日のさま思ひやらるゝなり。智月*の句に、

あちさゐはまだはなぢやもの四十からちゝ月

智月　近江國の人、芭蕉の門人。

鶯に手元やすめん流しもと。

やさしき娘心見えて愛らしからずや。

朝顔の咲くや親にも叱られず。

けさは幾つか咲き出でしなどと早起するも花ゆゑ、叱られぬも花ゆゑとなり。すて女*の句に、

秋色筆蹟

雪の朝二の字〳〵の下駄の跡

これは六歳の時の句なりとぞ。秋色*の句に、

雉の尾のやさしうさはる菫かな。

とは、雉の姿の優しく美しき風情を寫せるなるべし。なほ、

井戸端の櫻あぶなし酒の醉。

すて女　丹波國田氏、元祿十一年（一六九八）歿、年六十五。

秋色　大目氏、名は秋、江戸の人、其角の門人、享保十年歿、年五十七。

といふ名高き句あり。花讃*の句に、

かんざしよ櫛よさて世は暑いこと。

うるさきは髪飾なり。洗ひ髪などにて涼まばいかにとの心なるべし。

子を寝せた間を抜け出でて涼かな。

母とならではえ知らぬ涼しさなるべし。千代女*の句に、

郭公々々とて明けにけり。

澁かろか知らねど柿の初ちぎり。

鶯やまたいひなほしいひなほし。

破る兒のなくて障子の寒さかな。

蜻蛉釣今日はどこまでいつたやら。

などいづれもめでたし。

總じて女は物に感ずること深く、かく細かきところまでも思ひやり屆くゆゑ、その詠み出でたる句もまたあはれ深し。

花讃　古川氏、名はまつ、文政十三年（一八三〇）歿、年二十三。

千代女　加賀國の人、安永四年（一七七五）歿、年七十四。

自修文

二八　畸人一茶

本山荻舟

柏原の名主嘉右衞門がいそ〳〵として俳諧寺を訪れた。

「すぐにこれから私と一緒に本陣まで來て下され。」

「何御用で。」

「はて大切な御用だ。加賀樣參覲の御途次、當宿にお泊りなされて、此方の風流をお聞きなされ、是非その發句を見たいとあつて、目通り仰付けられたのだ。何と有難いことではないか。」

「折角だが御免蒙らう。」

「あれまあ何を言ふのだ。」

「宇宙萬物さうした御用で俗化されてしまふのが、私は大嫌ひな

本山荻舟　名は仲造、岡山縣の人、明治十四年生、報知新聞記者。

柏原　信濃國上水内郡柏原村。

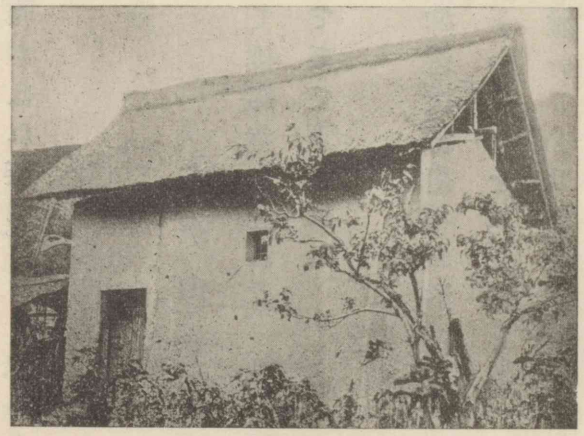
俳諧寺　小林一茶、一茶は通稱は彌太郎、信濃國の人、江戸時代後期の俳人。

加賀樣　加賀國金澤の藩主前田氏、所領百二萬石。

のだ。」

きよとんとしてゐた嘉右衞門は瞞すに手なしと、

「いや、これは私が惡かつた。御用と言つたは、つい何時もの口癖が出たので、加賀樣からは入魂のお招だ。わざ〳〵私の處へお使を下されて、表立つての御使者では却つて此方が迷惑であらう、どうぞ私からさう言つて、懇ろに同道してくれとのお賴みだ。此方の氣心はよう知つてゐながら、ついあんな事を言つたのは重々私の過だ。それがため若しも此方が來て下さらぬと、私は腹切仕事



小林一茶の舊宅

入魂　懇意、親密。

だから、どうぞさう言はずに機嫌を直して、一寸でも顏を出して下され。」

「あはゝ、腹切仕事はよく出來た。併し、それほどまでにお前樣を困らせては氣の毒だ。同道しませう。」

「やれ有難い。それでやう〳〵落着いた。」

「併し、衣服は改めない。尤も改める衣服もないが。この古布子でよからうの。」

古布子を二三度振つたまゝ、すぐに引掛けて出かけようとする一茶の袖を、嘉右衞門は一寸控へて、

「も一つ私の願だが、何といつても先は百萬石の加賀樣だ。此方も何時もの氣性を止めて、少しは御機嫌取に體のよいお世辭でも言ふやうにして貰へまいか。」

「あはゝ、これはまた異なお賴みだな。併し、外ならぬ名主殿のこ

布子　木綿の綿入。

とだ。思ひ切つてやりませう。」

「有難い〳〵。何時もそのやうに素直に言つて下さると、此方も好いお人だがなあ。」

「あはゝ、お前樣もまた何時もそのやうに腰が低いと、好い名主殿だがなあ。」

一茶は皮肉に笑ひながら、弊衣垢面、傴僂で跛で醜い姿を恥ぢる色もなく、平然として嘉右衞門と一緒に歩んだ。

柏原の本陣には梅鉢の紋打つた幕を張り渡し、盛砂に打水、高張提灯、儀容堂々として百萬石の威を示してゐたが、前田侯は案外打寛いだ體で一茶を引見した。嘉右衞門は無論御前へは出られなかつた。

「其方が一茶か。よう參つた。豫ねて風流の名は聞いてゐたが、

弊衣垢面　やぶれた衣服に垢まみれの顏。

俳味とはどんなことかの。」

一茶は畏れる氣色もなく膝を進めて、

「俳諧の道は孔釋の道と同じでござる。今の俳諧を言ふものは、たゞ題を得て發句を作るだけのことで、共に談ずるに足りませぬ。」

「さやうか。して、其方の俳諧はどうかの。」

「山水風月皆これ俳家生涯の事でござる。心の赴く儘に發するのが即ち自然の俳諧であつて、巧まぬものこそ最も俳味は濃やかでござらう。尸位素餐の輩に眞の俳諧が分らう道理はござりませぬ。」

小林一茶

孔釋　孔子と釋迦。

尸位素餐　位に居つてその責を盡さず空しく祿を食むこと。

と傍若無人の放言に、席に在るものは色を變へたが、侯は却つてにこやかに、

「齒に衣着せずよう申した。聞きしに違はぬ其方の器量。予はその意氣が氣に入つたぞ。」

「はっ、恐れ入りまする。」

「これ、一茶に膳部を取らせよ。」

「はっ。」

やがて運ばれた膳部に對しても、一茶は何の遠慮もなく心の儘に頂戴した。次いで引出物として時服一領下された。一茶は一寸考へてゐたが、にこりと笑つて、

「有難く頂戴仕りまする。では、これでお暇を。」

「さやうか、大儀であつたの。」

一茶は御前を下らうとして、何故かふと躊躇した。

傍若無人　人前をはばからずに勝手に振舞ふこと。
器量　才器德量。
引出物　祝儀その他の宴會の時來客におくる品物。
一領　ひとそろひ。
躊躇　ためらふ。

「どう致したか。」

「いや、とんだことを失念致しました。高貴の御前へ出たら、必ず追從申すやうにと、折角名主に賴まれて參つたのに、とんと忘れて居りました。改めてお世辭を申上げます。」

と一茶は額の汗を拭きながら低頭した。

「はゝゝ、面白いことを申す。その罰として一句詠まぬか。」

「子供までのんのうと呼ぶ梅の花。」

一茶としては珍しく如才のない句であつた。

上首尾で本陣を出た一茶は、間もなく庵に入ると、早速硯を引寄せて、塵紙の皺を伸ばし、禿筆を嚙んで、

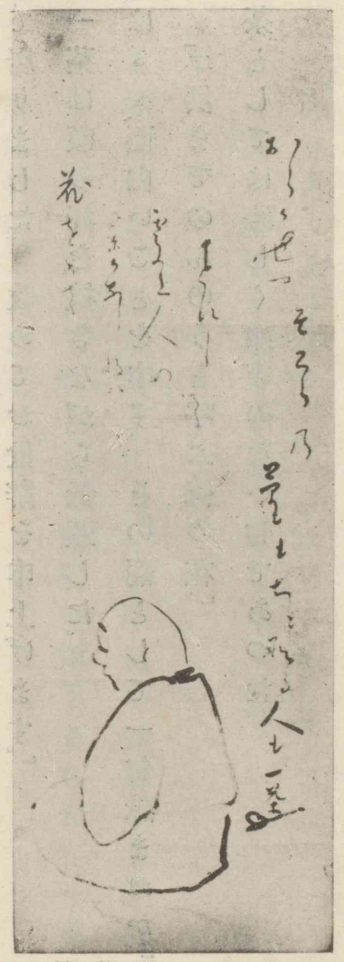
何のその百萬石も笹の露。

と書いた。門人は顏を見合せた。

追從　こびへつらひ。
禿筆　ちびた筆。

享和某年にぶらりとまた江戸へ出た一茶は、藏前の札差で井筒屋八右衞門といつた夏目成美の許を訪ねた。

「信州の竹阿と申すものだが、御主人御在宅ならお目に懸りたい。」



小林一茶筆蹟

店にゐた番頭が、裝を見て眉を顰めながら、

「どんな御用ですか。」

と無愛想な挨拶をした。

享和　光格天皇の年號。（一八〇一―一八〇四）

札差　旗本・御家人の家祿である廩米の受取方及びその賣買などを請負ふ商人。

花をめで月にかなしぶは雲の上人のことにして　おらが世やそこらの草もみちになる人も一茶

夏目成美　江戸の俳人、文化十三年（一八一六）歿、年六十八。

竹阿　その頃の一茶の號。

「別に用事といふではござらぬが、風流の道に遊ぶもの、御高名を慕うてお訪ね申したのだ。」

「さうですか。それは折角でしたが、生憎主人は近頃病氣で寢てゐますから、とてもお目には懸りますまい。」

「ほう、御病氣でお目に懸れぬ。それは殘念だが致方がない。重ねてお訪ねもなるまいから、誠に申しかねますが、一寸料紙と筆とを拜借願ひたい。」

信濃では月と佛とおらが蕎麥。

「とんだお邪魔を致しました。」

その儘暇を告げて、すた〳〵御厩橋の方へ歩いて行つた。

「もし、其處へお出でのお方、一寸お待ちなされて下さい。」

「呼ばれたのは私のことかのう。」

御厩橋　隅田川に架けてある橋、吾妻橋と兩國橋の間にある。

「へい、あなたが信州のお客様でしたな。」

「信州の乞食坊主だが、して、お前様は。」

「井筒屋のものでございます。只今はとんだ失禮を致しました。朋輩のものが大變主人に叱られました。お殘し下さいました句を主人に見せました所、お目に懸りたいと申しますから、どうぞもう一度お立寄をお願ひ申したいので。」

「はゝゝ、それは却つて痛み入りました。固よりお目に懸りたくてお訪ね申したのだから、幾度でも戻りませうとも。」

一茶は快く踵を返した。

成美は若い頃から脚を病んで、起居にも自由を缺き、自ら不隨齋と號してゐた。不具な一茶に對して同病相憐む心からでもあつたらう、快く家に留めて、何時までも逗留することを勸めた。

踵を返す　あとへ引返す。

「話は後でゆつくり出來る。先づ湯にでも入つて、旅の疲を休めるがよからう。」

「それは何よりよい。湯といふものには最早幾月對面せぬか分りませぬわい。」

「あゝ、すつかり旅の垢を落して、久しぶりに好い心持でござりました。」

と言ひながら、座敷へ戻つた一茶の顏を見ると、青や赤や色々の斑が、隈取のやうに染みついて居るので、成美は思はず噴き出した。

「はゝゝ、どうなされた。」

「はて、何がそのやうに可笑しうございますか。」

と、何にも知らずに平氣で居るのが益、

本山荻舟

本山荻舟自署

隈取　役者などが顏にほどこす色彩。

可笑しい。

「何がではありませぬ。まあ一度鏡を見なさるが好い。」

「鏡などといふ物はついぞ見たこともございませぬが、一體どうしたといふので。」

「いや、どうもかうもない。湯にはいつて何をしてお出でなされたか。顏ばかりではない。兩手にまでその通りえたいの知れぬ斑點をつけて居られるではござらぬか。」

「や、これは大變。はゝゝ、分りました。湯から上つて軀を拭くのに、つい手拭を忘れて出たので、取りに入るのも面倒と、袂にあつた風呂敷で間に合せたが、さてはこの色が移つたのでござらう。」

と、平氣で取出して見せた。それは可なり汚れた更紗の風呂敷であつた。一茶にこんな無頓着は珍しいことではなかつた。

贔屓目に見てさへ寒き素振かな。

めでたさも中くらゐなりおらが春。

露散るやおの〳〵明日は御用心。

痩蛙負けるな一茶是に在り。

罷出たるはこの藪の蟇にて候。

などは何れも人口に膾炙し、またよく一茶の人と爲りを現して居る句である。

文政二年の冬十月十六日から一茶は中風に罹つたので、再び遊歷の望を絶ち、餘命幾何もないことを感じて、壽命決定の辭を作り、

ともかくもあなた任せの年の暮。

と口吟んだのは師走の二十九日、五十七歳の暮であつた。併し、壽命はまだ殘つて、また新しい春を迎へたので、元日の句に、

人口に膾炙する　ひろく人々の口にのぼり言はやされる。

文政　仁孝天皇の年號。（一八二四—一八二九）

今年から丸儲ぞよ娑婆の空。

と詠んで、以來蘇生坊と稱してゐた。

文政十年霜月、病氣の上に老衰が加はつて、十九日遂に臨終と見えた。門人が「何ぞ辭世でもありませぬか。」と言ふと、一茶は微かに口を動かして、

「盥から盥に移るちんぷんかん。」

と言つた。そして、木の葉と共に散つた。享年六十五。火葬にして明專寺に葬つた。

その後、門人が記念に建てた「松蔭に寢て喰ふ六十餘州かな。」の句碑は今も殘つて居る。（名人畸人）

二九　夕靄の野

中西悟堂

野にはもう夕靄が流れ始めた。

娑婆　この世。

享年　世に生存した間の年齢。

明專寺　柏原にある寺。

中西悟堂　金澤市の人、明治二十八年生、詩人。

あちこちの枯木立の梢は、
夕日の殘光に染められ、
靜けさと平和とに領せられた麥畑には、
黙つて農夫が働いてゐる。
その敬虔な勞働の姿よ。
ときゝ鍬が白く光るが、
靄はもう彼等を包みながら、
青麥の上を、
生き物のやうに這ひ廻る。
畑の路を、
笠を抱へた娘が、
家路の方へと歸つて行く。

笊に盛られた京菜の新鮮な緑、
そして、頰冠の下に見える娘の顔の
單純な健康な笑よ。
娘は畑を抜けて、
木立の道を、
夕餉の煙吐く垣根の方へ、
跣足のまゝ急いで行く。

神の言葉に充ちた
平和な野よ。
こゝには愛と許との外の何物もない。
地平線には、
墨繪のやうな富士が風に吹かれてゐて、

その上に、
夕の星が出現した。
農夫達がそれに對つて、
一日の恙ない勞働を感謝し、
明日の幸福を祈るところの
慈悲ある星が出現した。

三〇　仁和寺の法師

吉田兼好

一　石清水

仁和寺（にんなじ）にある法師年よるまで石清水（いしみづ）を拜まざりければ、心うく覺えて、或時思ひ立ちて、たゞ一人徒歩（かち）よりまうでけり。極樂寺・高良（かうら）などを拜みて、かばかりと心得てかへりにけり。さて、かたへの人に逢ひて、「年ごろ思ひつること果しはべりぬ。聞きしにも過ぎて

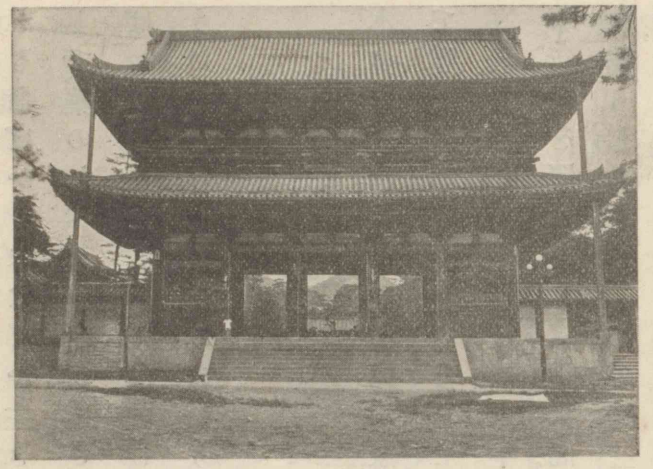
吉田兼好　本姓は卜部、鎌倉時代の文學者、正平五年（一三〇〇）歿、年六十八。
仁和寺　京都の西、山城國葛野郡花園村、光孝天皇の勅願寺。
石清水　石清水八幡宮、また男山八幡宮ともいふ。
極樂寺・高良神社　二つとも男山の麓にある末寺・末社。

尊くこそおはしけれ。そも参りたる人ごとに山へ登りしは、何事かありけん。ゆかしかりしかど、神へ参るこそ本意なれと思ひて、山までは見ず。」とぞいひける。少しのことにも先達はあらまほしきことなり。

二　鼎かづき

これも仁和寺の法師、童の法師にならんとする名殘とて、各〻あそぶことありけるに、醉ひて興に入るあまり、傍なる足鼎を取りて頭に被きたれば、つまるやうにするを、鼻を押平めて顏をさし入れて舞ひ出でたるに、滿座興に入ること限りなし。暫し奏でて後、拔かんとするに大方拔かれず。酒宴ことさめて、「いかゞはせん。」と惑ひけり。とかくすれば、首のまはり缺けて血垂り、たゞ腫れに腫れ滿ちて、息もつまりければ、打割らんとすれど、たやすく割れず、響きて堪

へがたかりければ、かなはで、すべきやうなくて、三足なる角の上に帷子を打掛けて、手を引き杖を突かせて、京なるくすしのがりゐて行きけるに、道すがら人の怪しみ見ること限りなし。くすしの許に差入りて向ひゐたりけん有樣、さこそ異樣なりけめ。物をいふもくゞもり聲に響きて聞えず。「かゝること」は書にも見えず、傳へたる敎もなし。」といへば、また仁和寺にかへりて、親しきもの、老いたる母など、枕がみに寄りゐて泣き悲しめども、聞くらんとも覺えず。かゝるほどに、或者のいふやう、「たとひ耳・鼻こそ切れ失す



仁和寺山門

とも命ばかりはなどか生きざらん。たゞ力を立てて引きたまへ。」とて、藁のしべをまはりにさし入れて、かねを隔てて、首もちぎるゝばかり引きたるに、耳・鼻缺けうげながら拔けにけり。からき命まうけて、ひさしく病みゐたりけり。（徒然草）

三一　鬼作左

新井白石

*本多作左衞門重次は徳川家譜代相傳の御家人なり。生年七歳にて*贈大納言殿に仕へ參らせしより*徳川殿の御時に至つて、度々の高名數を知らず。*永祿八年三河國盡く御手に屬しければ、始めて奉行職を置かれ、本多重次・高力清長・*天野康景三人に仰せて、その職を掌らしめらる。この時、三河國にて、歌に、「佛高力・鬼作左、どちへんなしの天野三郎兵衞。」と謠ふ。重次は恐ろしげなる男の、己が言ひたきことをばありのまゝに打言ひ、いかにも思慮ある人とも見え

本多重次　三河國の人。
贈大納言　徳川廣忠。
徳川殿　名は家康。
永祿　正親町天皇の年號。（三二八―三三九）
高力・天野　ともに三河國の人。

ず、かゝる職務に堪ふべきものにあらずと見えしに、心正しく直く、しかも民を使ふに慮ありて、訟を聽き分つこと明かなりしかば、人皆徳川殿の御計らひを感じ參らせしとなり。

本多重次

*天正十二年、*小牧の役あり。やがて秀吉・信雄仲直りし給ひ、信雄について*於義丸殿を養君とし給ふ時、重次が子仙千代丸も、*石川伯耆守數正が子と同じく附けて參らす。抑この於義丸殿と申すは徳川殿の御二男、故ありて生れ落ちさせ給ひしより、重次取りて養ひ參らす。今年御歳十一になり給ふが、都に上らせ給ふことを御名殘惜しく思ひしかば、我が一人子にて愛しける仙千代丸附けて參らせたり。秀吉

天正　正親町・後陽成兩天皇の年號。（三三三―三三一）
小牧　尾張國。
信雄　織田信長の次子。
於義丸　越前少將秀康の幼名。
石川數正　徳川家の世臣。

も上には於義丸殿を養ひ參らすとは披露あれど、内々は人質とし、徳川殿に親しくならん謀なりければ、「本多は殊に彼の譜代のおとなり。その子を參らせしことこそ嬉しけれ。」と、悦び給ふこと斜ならず。

さるほどに、秀吉正二位内大臣に歴上り、關白の職になつて、於義丸殿にも元服せさせ、秀康と名のらせ、從四位下左少將兼三河守に任じ、信雄卿を媒とし、徳川殿御上洛のことを勸め給ふこと度々に及べども、上り給ふべしとも聞えず。よつて三河守殿も失はれさせ給ふべしなど風聞す。三河守殿の御母このことを聞き給ひ、「守殿失はれ給ひて後、一日も世に長らふべしとも覺えず。死なば一所にこそ死なめ。」とて、忍びて大阪に上らせ給ふ。

重次、「いや〳〵、仙千代丸を都におきて人の疑受けんことも詮なし。たゞ一人ある子失はれんも不便なり。」と思ひければ、「母がいたはり

以ての外に候。暫しの暇を賜はりて、この世の暇乞をも仕らせばや。」と、守殿へ申して呼び迎へぬ。幾程なく、石川伯耆守數正は徳川殿に背きて、秀吉の御方に參る。さてこそ重次が二心なきところ顯れて、まことに思慮深くは見えけれ。

かくて關白殿の仰にて、「仙千代丸疾く參らすべし。」と、守殿よりの御使度々に及ぶ。重次もせんかたなく、「これもいたはるところの候。且は母が病も年頃この子戀ひ慕ひし故なれば、『今更參らすべしともおぼえず。』と伏し沈み歎きぬ。されば、息男が身代りに、このものを參らす。」とて、甥の源四郎富正を參らす。關白殿、「安からぬことなり。本多奴に誑られたりけり。」と怒り給ふこと大方ならず。

かゝりしほどに、また東西の軍起りなんと聞えて、宗徒の御家人の中、岡崎の城守るべきものを選ばる。本多佐渡守正信承りて、「この城を枕として討死仕るべきものに仰付けらるべし。」と申しければ、

岡崎　三河國。
本多正信　小字は彌八郎。

やがて重次召して、岡崎の城を賜はり、數百騎の兵を屬けらる。この時重次が御暇乞申しし氣色、生きて再び見參すべしとも見えざれば、その志を感ぜさせ給ひて、息男成重本領安堵の御書をなし下さる。その御書に、「天正十三年十二月八日」と記され、「本多丹下殿へ」となされきとなり。

大廳

關白殿いかにもして德川殿と親しうならんと、いろ〳〵に謀をめぐらし、やがてまたその妹*君を德川殿の北の方に參らせられしかば、德川殿この上は見參なくては叶ふまじとて、御上洛あるべきにきまる。「御家人等が危く思はんところも侍る故、都に御逗留あらんほどは、それに留めさせ給ふべし。」とて、大廳*を下し給ひ

妹　朝日姫、後に南明院といふ。

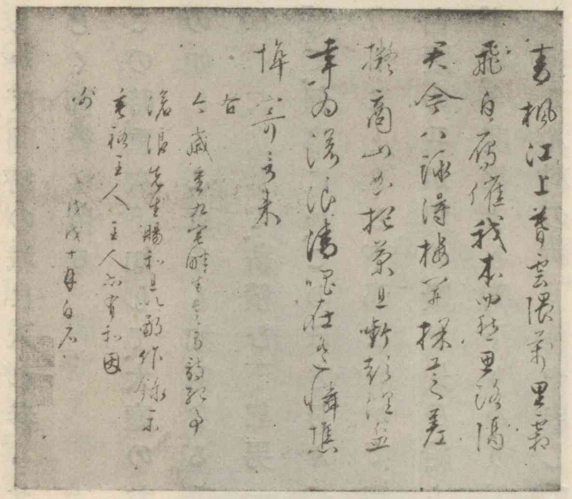
大廳　秀吉の母。

しかば、岡崎の城に入れ參らせ、重次これを守る。井伊*・大久保*も同じく御後に留る。

この時、重次下知して、大廳のおはしますほとりに薪を積むこと山の如し。こはそも如何なることぞと驚き、大廳の御供せし女房達、はした女して、薪積む下部男一人招き、酒など飲ませ、心よくとりて、「さて、何事にか、このほど日々にかく薪を積むことぞ。」と問へば、「如何なることとも下郎はいかで知り申さん。たゞし、承るところは、『關白殿の我が國の殿を失ひ給ふか、もしくは留め參らせて返し給はずば、今度都より御下りありてこれにまします御方を盡く燒き殺し申さん料の薪。』とかや申して、本多殿の下知として、日々に山林より伐りて候が、この本多殿と申すは極めて氣の短き人にて、殿の御歸り遲し〳〵と待ちかねて、けさ火を附けう、晩に燒きたてうとせられ候を、井伊殿や大久保殿が『暫し〳〵。』と制し給へばこそ、今まで

井伊　名は直政。
大久保　名は忠世。

はかくて候へ。『いたはしや、美しき都上臈の、今の内にも灰土にならせ給はんことの無慚さよ。』と、下郎等は申すことにて候。」といひしを、女房達にかくといへば、「あな悲しや。その本多といふ男が日々に参りて、恐ろしげなる聲音にて、『家康よりこゝに附け参らせて候。御用のことあらば承りなんず。』といふを、今思ひ合すれば、三河殿の始めて御参りありし時、仙千代丸といふ兒の御供した



新井白石筆蹟

青楓江上暮雲陰、萬里羅飛白雁催、我本四愁思路隔、君今八詠得樓開、探芝差擬商山曲、把菊且嗤彭澤盃、幸爲滄浪清唱在、遙憐憔悴寄言來。

右

今歳重九、宅畔生芝、有詩紀事、滄浪先生賜和、且以鄙作錄示垂裕主人、主人亦有和、因謝

戊戌十月　白石

るを、殿下の御覽じて、『あれは家康が内にて三奉行とかいふ中の鬼作左衛門といふものの子ぞ。』と仰ありしかば、『恐ろし〳〵。鬼も子を生むにや。鬼の子は如何なるものにや。』とて、物越しに人々の見たりしに、その親の鬼ならばさこそあらめ。されば、これへ参る度毎に、家康歸り候はんとのことは、未だ御沙汰も聞え候はずや。』と、をとゝひもいひしぞ、今朝も昨日もいひしぞ、待遠にや思ふらん。あはれ、家康疾くして返させ給へかし。」と、泣き口説きてこの由を大廳へ申しければ、大いに驚き歎き給ひて、日々の御消息ありて、「徳川殿を疾く返させ給へ。こなたの有様のいぶせさ、いつの世にかは忘るべき。」など、ありしことどもこまゞ〳〵と仰せ遣はされしほどに、程なく御歸國まし〳〵、大廳歸り上らせ給ひければ、女房達涙を流し、「情なくも御母上を下し給ひしものかな。鬼本多とかやが、とこそ言うたれ、かくこそ計らうて候ひつれ。今は朝日の姫君を参ら

せ給へば、德川殿の御爲にも大廳は御母上にて候を、いかに鬼なればとて、己が主のこと知らぬことや候べき。それにかく辛き目を見せ參らせて侍れば、はや〳〵德川殿に仰せられて、如何なる罪にもあはせて、大廳の御恨をも晴らさせ給へ。」と、とり〴〵に訴へければ、關白殿笑ひて、「家康はよきものども數多召使ひけり。秀吉もその如き家人をば欲しきことに候ぞや。」とばかり宣ひて、御座を立たせ給ひきとなり。（藩翰譜）

三二　税所敦子君を誄す

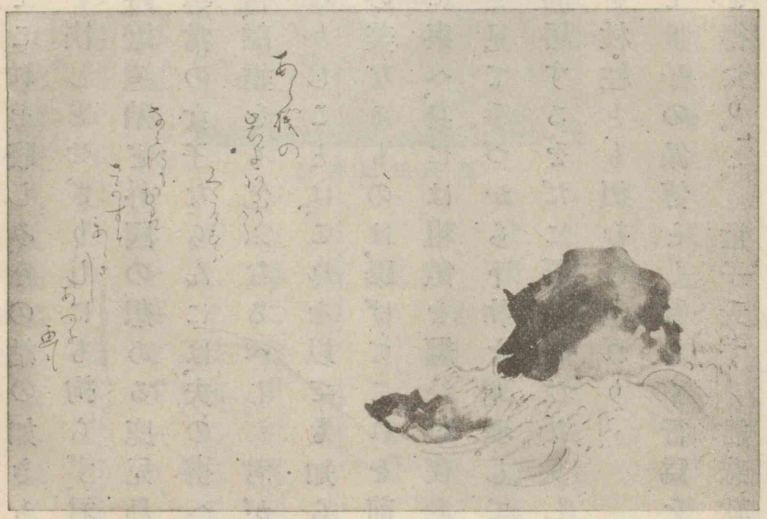
高崎正風

嗚呼、税所刀自逝きぬ。我が無二の友たりし掌侍正五位税所敦子君逝きぬ。忠孝慈貞なりし君が前半生の行狀は鹿兒島士民の普く知るところ、その後半生の名譽は輦轂の下に隱れなし。然れども、前後に通じてよくこれを知悉せるは蓋し正風ならん。正風が

高崎正風　鹿兒島市の人、男爵、歌人、宮内省御歌所長、明治四十五年歿、年七十七。
税所刀自　明治三十三年二月四日歿、年七十六。

歌によりて始めて君と相見しは、君が齡三十に垂んとせし時にして、正風が歳十九の頃なりき。相見しは歌によるといへども、仰ぎ慕ひしは君が高節によれり。

君は正風と藩を同じくして京都に勤務せる税所篤之氏の繼室となり、嬰兒を懷にして不幸にも夫に訣れたり。嗚呼、君は京都に生れ京都に成長し京都に結婚せる優美艶麗なる婦人なりき。當時鹿兒島の風習た



税所敦子筆蹟

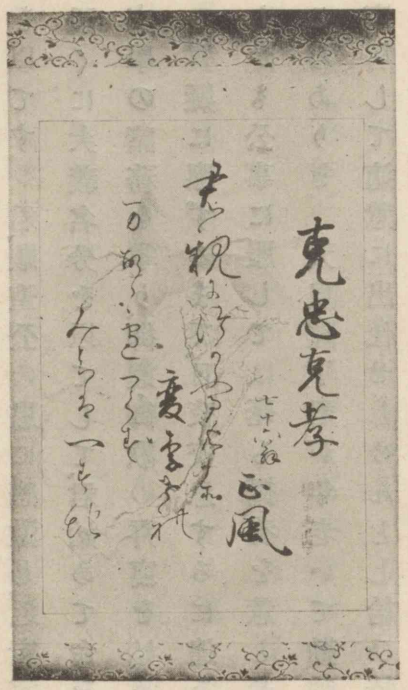
あら磯の岩にあたりてくだけずばなみにも花はさかずぞあらましあつ子畫

るや、同郷人の外は餘所者としてこれを賤しみ、その姑の如きも京女の新に來りて同居することを快しとせざりしにも拘らず、君は正當の理に循ひ、自ら奮ひて當時遼遠殆ど外國の想ある鹿兒島に歸りて、その姑に事へき。嗚呼、尋常の女子ならんには、夫の携へ歸らんとしてもなほ難色あらん、否、離婚をも乞ふなるべし。君が己に克つ勇氣に富み、志操の秀拔なりしことは、これを以ても知らる。況や京都より齎ししし衣服・調度の美なるものは、擧げてこれを前妻の出にして鹿兒島に在りし女に與へ、身には粗敝を纏ひ、日夜老いたる姑を看護し、その酒を嗜むを見て、手づから下物を調理して口腹に適せしめしかば、曾て君と同居するをだに厭ひ嫌ひたりし姑は、未だ月を重ねずして、忽ち君を杖・柱とも賴むに至れり。

國君順聖公これを聞き、拔擢して世子の保傅とし、親しく行爲を觀察して、大いに喜びて曰く、「吾、人を得たり。」と。世子夭す。君悲歎に

順聖　鹿兒島藩主島津齊彬。

堪へず、自刃して殉ぜんとす。姑取縋りて泣きて曰く、「我今御身を失はば、何を樂しみてかこの世に生き殘るべき。」と。君これがために止まりぬ。



高崎正風筆蹟

正風嘗て君に就きて歌談を聞く。訪ふ毎に、一婢ありて君が傍を離れず。また正風が詠草を返附せらるる毎に、必ず正風が母若しくは姉に宛てて送らる。當時正風迂疎にして、その何の故たるを解せざりき。後に思へば、嫌疑を遠ざくる用意の周到なりしなり。嗚呼、忠孝・慈貞誰かこれに加へん。後、久光公の女光蘭夫人、近衞忠房公に嫁せら

克忠克孝　七十六翁　正風
君親につかふる名こそ變りけれまごゝろつくすみちは一すぢ

久光　齊彬の弟、明治の初左大臣となつた。光蘭夫人名は貞姫。

るゝや、君扈して東上して老女となり、下僚を遇すること慈愛を極めたりき。

明治八年に至りて、坤宮女流の人材を徵し給ふ。正風薦むるに君を以てす。君、順聖公の恩に感激し、近衞家を去るに忍びず。正風說くに大義名分を以てして、君始めて命を奉ぜり。爾來兩陛下御文學の諸務を掌り、御製御歌の拜寫を始め、同僚宮女のために百事の質疑に應ずるまで、日夜安息するに遑あらず。君もと蒲柳の質、しかも公事に服しては毫も攝養を意とせず。往年大いに病むところありき。天皇陛下君が年老いて勤勉の過度なるを憐み給ひ、家居して適意に出仕せしめんとし給ひ、特に正風をして內旨を傳へしめ給ひしが、君安んずること能はず、平素嫌厭せし牛乳を服して氣力を養ひき。癒ゆるに及びて宮中に入り、鞅掌すること故の如し。

坤宮　昭憲皇太后。

天皇陛下　明治天皇。

嗚呼、君が八百年以來たゞ一人の女文豪たりしことは、世人皆これを知る。君夙く三寶に歸し、慈善を好むこと飲食よりも甚しく、我が彰善會の起るや、尤も熱心なる贊成者として、金員を寄附せらるること數、なりき。君去んぬる一月五日、正風が病床を訪ひて、告げて曰く、「明年七十七、謂はゆる喜字の齡たらんとす。聊か自ら壽すべし。」と。正風大いにこれを贊し、爲に盛大なる宴を張り、朝野の詞藻を蒐集せんと期したりしを、今は遂に全く畫餅となりぬ。正風今かくの如く忠孝慈貞なりし無二の友を喪ひ、身病褥に橫たはりて、葬場に會することをだに得ざるは、何等の慘ぞ、何等の痛ぞ。豈に慟哭せざるを得んや。病を勗めてこの誄を草し、兒元彥をして代讀せしむ。嗚呼、哀しいかな。

三三　歌を選びし旨を報ず

稅所　敦子

彰善會　善行を表彰する會、作者はその會長であつた。

一月　明治三十三年。

元彥　正風の長男、海軍少佐、明治三十七年旅順で戰死した。

時候不順の折柄まさ〳〵御健やかにいらせられ候ふ事めでたく存じ悅び申上げ候　この程は光來を辱うし殊に珍しき御歌書ふ恵み下され有難く存じ禮申上げ候　其の節は預り申上げ居る「御垣の下草」へはしるしを附け申居　しるしを附け申ゐ外にも宜しと存ぜ考へに相成り居る歌ふ座候はばは用ひ下されたく候　この品誠に粗末に居へども存ぜ目に懸け申居「内外部史歌集」ふ笑草に差上げ居　延引ながら右の由一筆申上げ候　かしこ

敷子

佐々木信綱様
みもとへ

自修文

三四　女子海外留學の先驅

西村渚山

日本から公式に留學生を西洋に送つたのは、德川幕府の末期からのことで、現に文久二年の頃、〔和蘭〕オランダ Holland へ遊學を命じられた人に、内田恆次郎・澤太郎左衞門・伊東玄伯・林研海・榎本釜次郎・赤松大三郎などといふ顔觸のあつたことが記錄に殘つてゐる。無論オランダのことだから、此等の人々の學んだものは主として航海術だつた。〔亞米利加〕また慶應三年に、勝海舟はその子息をアメリカ America に遣はして勉强させた。富田鐵之介・本間英一郎・兒玉章介・白峰駿富なども、名はあまり知られてゐないが、當時やはり留學生として、アメリカの學窓生活を送つた人である。

明治四年は十一月十二日の凪の朝、横濱沖に堂々として碇泊した米國船に、快い海氣を胸一杯に吸ひこみながら、いそ〳〵として乘りこんだ活潑な五少女があつた。傍には、歸國の途にある、時の米國全權公使の夫人がゐて、なにくれとなく親切に世話してゐるの

佐々木信綱
三重縣の人、明治五年生、歌人、文學博士、東京帝國大學講師。

西村渚山
名は恵次郎、滋賀縣の人、明治十一年生、文士。

文久
孝明天皇の年號。（一八六一―一八六三）

榎本釜次郎
後に武揚といふ。

慶應
孝明・明治兩天皇の年號。（一八六五―一八六七）

勝海舟
名は安芳、舊幕臣、伯爵、明治三十二年歿、年七十七。

出發當時の五少女（右から吉益亮子・津田梅子・山川捨松・永井繁子・上田悌子）

も美しい情景だつた。その一團の中、二人は妙齡の華やかな光彩を放つてゐたが、他の三人はまだ文字通りの少女だつた。この人達は、皆お名殘に振りの長い友禪縮緬の着附でゐた。でも、その澄んだ眼色には、理智の輝きと氣高い憧憬の情緒とが讀まれた。この少女達は、その二三日前、宮內省に召出されて、皇后宮から賜はつた立派なお書付を、現に大事に持つてゐる人々だつた。それには、

情景　ありさま。
妙齡　年頃。
憧憬　あこがれ。
情緒　感情。
皇后宮　昭憲皇太后。

「其方女子ニシテ洋學修業ノ志誠ニ神妙ノ事ニ候。追々女學御取建ノ儀ニ候ヘバ、成業歸朝ノ上ハ、婦女ノ模範トモ相成候樣心掛、日夜勉勵可致事。」

と、かうあつた。この五少女こそ日本に於ける女子留學生の先驅者だつた。

この五少女は果して誰々だらう。當時、係船員の手帳には、次のやうに誌されてあつた。

Oshimatsu; Oneda; Yamagewa; Tsuda; Nagai.

これを正誤して、詳しく書けば、

吉益亮子（十五歲）　上田悌子（十六歲）　山川捨松（十二歲）　津田梅子（七歲）
永井繁子（十二歲）

である。

その頃、拓殖の新知識を米國に得た黑田北海道開拓使長官は、同時

神妙　けなげ。
先驅　さきがけ。
黑田長官　名は清隆、鹿兒島の人、伯爵、明治三十三年歿、年六十一。

に女子教育の上にも力のある暗示を受けて、熱心な女子教育の主張者であり擁護者だつた。その結果、終にこの女子の留學てふ破天荒な盛事の一端を產んだのだつた。いふまでもなく、その津田梅子とは今日の津田英學塾長で、山川捨松とは故大山巖元帥の夫人で、上田悌子とは故上田敏博士の叔母に當る人であり、また永井繁子といふのは、瓜生海軍大將夫人で、曾て東京女子高等師範學校の教授だつた人である。

黑田清隆

この事あつて以來、女子教育の必要を叫ぶ聲が諸所に起つて來た。そして、明治五年二月に至つて、大學南校中の一部に、始めて女子のための學校が出來た。その頃の女子教育は、例の萬事が直譯時代

暗示　それとなしに注意を起させること。
擁護　保護。
破天荒　これまでにないこと。
大山巖　鹿兒島の人、陸軍大將、公爵、大正五年歿、年七十五。
上田敏　東京市の人、英文學者、文學博士、京都帝國大學教授、大正五年歿、年四十二。
瓜生海軍大將　名は外吉、石川縣の人、安政四年生、男爵。

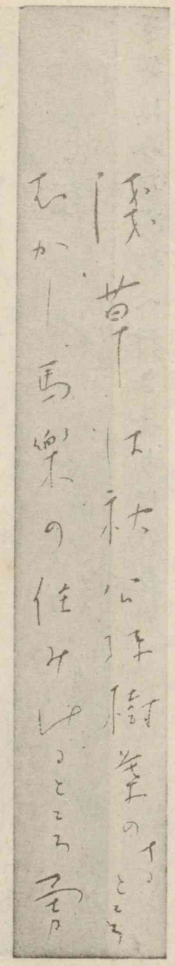
のことととて、殆ど洋學本位で、程度の非常に高かつたことが容易に想像される。

三五　現代歌人の和歌

○

我のごとなれもこの世を嘆れるや、
なにをかさけぶ鐮倉のうみ。

吉井勇


吉井勇筆蹟

砂の丘ほのかに黃なる花咲きぬ、
愁ふる人のなぐさめのため。

○

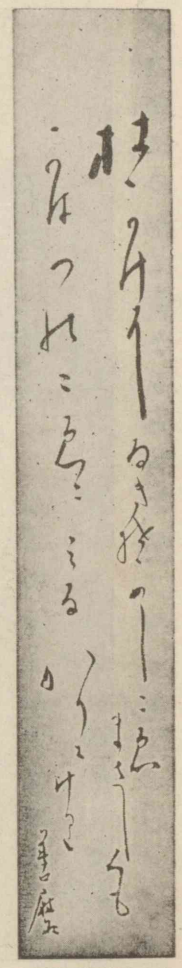
土岐善麿

吉井勇　東京市の人、明治十九年生、伯爵。

淺草は秋公孫樹葉のちるところむかし馬樂のすみけるところ　勇

土岐善麿　東京市の人、明治十八年生、東京朝日新聞社員。

夕暮の卓子の上に棄ててありし
　玩具の笛を吹いて見るかな。

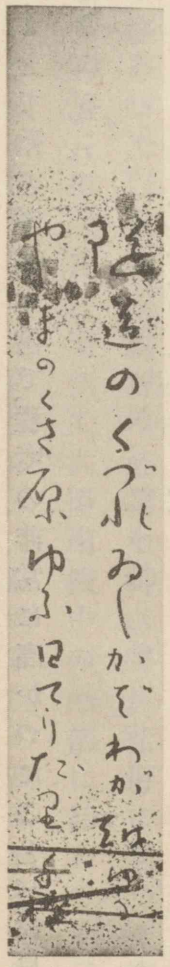


土岐善麿筆蹟

子等はみな學校へ行き去りにけり
　家の前なる若葉の路を。

○

行く道に隧道の口見えにしが、
　山菅負ひて人出で來れり。



古泉千樫筆蹟

古泉千樫

古泉千樫
名は幾太郎、千葉縣の人、昭和二年歿、年四十二。

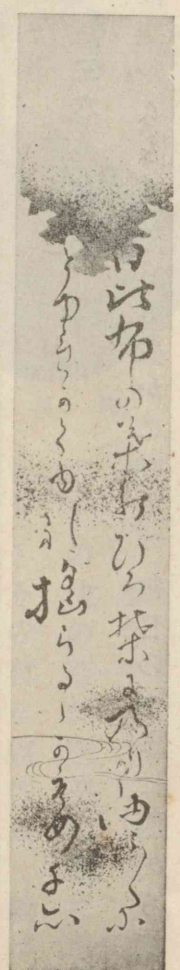
杜かげになきそめしこゑまさしくもかはづのこゑにみなりにけり
　善麿

隧道のくづれのしかばわがを越ゆるやまのくさ原ゆふ日てりたり
　千樫

かゞやかに風わたるらし行く道の
　柿の若葉の動きつゝ見ゆ。

○

雨の夜を蟲きゝながら拾ひ來し
　わさ栗燒きぬ山のはたごや。



石榑千亦筆蹟

石榑千亦

父も踏み母も踏みけん土の香の
　その香にしあれや懷かしその土。

○

南國の夕日の海の照りかへし、
　焔の如く燃えぬものなし。

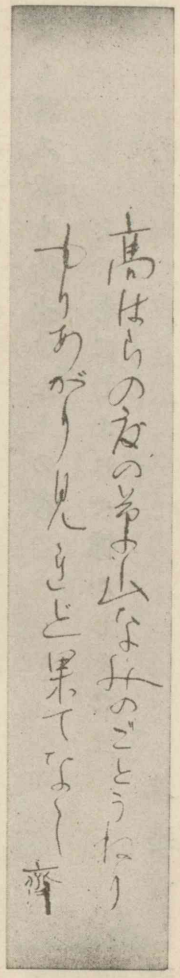
萬造寺　齊

石榑千亦
名は辻五郎、愛媛縣の人、明治二年生。

昆布の葉のひろ葉にのりてゆら〳〵にゆれかくゆれ搖られるかも
　千亦

萬造寺齊
鹿兒島縣の人、明治十九年生、眞宗大谷大學教授。

秋の田のこがねの海に我もまた
　刈りや入らまし利鎌手に持ち。



萬造寺齊筆蹟

高はらの夏の草山なみのごとうねりもりあがり見れど果てなし　齊

三六　春の蛙

長塚節

春は空からも土からも微かに動く。毎日のやうに西から埃を捲いて來るはやてが、どうかするとはたと止まつて、空際には、ふはふはした綿のやうな白い雲がほつかりと暖い日光を浴びようとして、僅かに立ち騰（のぼ）つたといふやうにぢつと動かずにゐることがある。水に近い濕つた土が暖い日光を思ふ存分に吸うて、その勢づいた土の微かな刺戟を根に感じさせると、田圃の榛（はん）の木のじみな

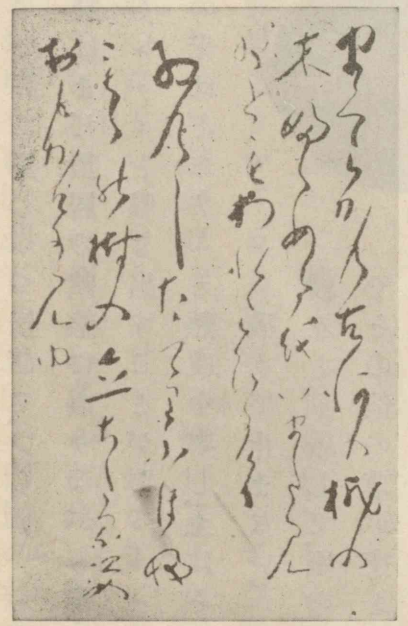
長塚節（たかし）　茨城縣の人、文學者、大正四年歿、年三十七。

蕾は目に立たない間に少しづつ延びて、ひら〳〵と動き易くなる。その刺戟から、蛙はまだ蟄居の狀態にありながら、稀にはそつちでもこつちでもくゝゝゝと鳴き出すことがある。

空から射す日の光はそろ〳〵と熱度を増し、土はそれをいくらでも吸うて止まない。土は凡べてを段々と刺戟して、堀の畔には蘆や芝やその他の草が空と相映じて、すつきりとその首を擡げる。軟かさに滿たされた空氣を更に鈍くするやうに、榛の木の花はひら〳〵と絶えず動きながら、花粉を撒き散らしてゐる。蛙は假死の狀態から離れて、軟かな草の上に手を突いては、驚いた樣子をして空を仰いで見る。さうして、彼等は慌てたやうに聲を放つて、その長い睡眠か

長塚節

ら復活したことを空へ向つて告げる。遠くから聞く時は、彼等の騒がしい聲がたゞ空にだけ響いて、いかにも快げである。彼等は更に春の來たことを一切の生物へ向つて告げる。草や木が心づいてその活力を十分に發揮するのを見ない中は、鳴くことを止めまいと力める。田圃の榛の木はとうに花を捨てて、自分から先に嫩葉の姿になつて見せる。その黄色みを含んだ嫩葉が爽やかな朝日を浴びて、快い光を保ちながら、蒼い空の下にまだたゆたうてゐる周圍の林を見る。岬

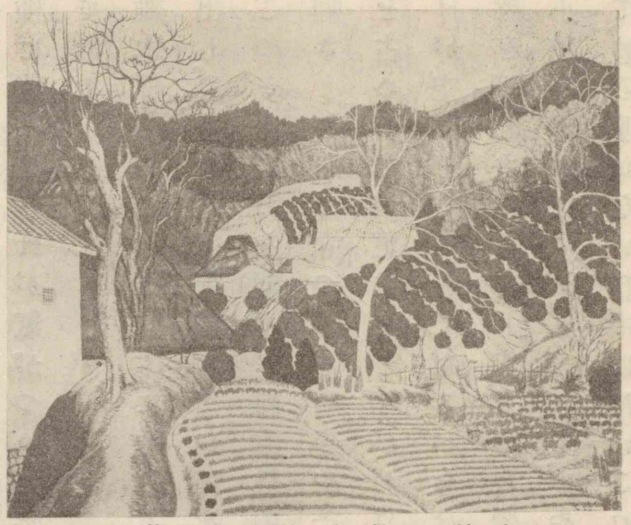


長塚節筆蹟

まくらかの古河の桃の木ふゝめるをいまだ見ねどもわれこひにけり
紅のしたてりにほふもゝの樹の立ちたる麥おもかげに見ゆ

のやうな形に偃うてゐる水田を抱へて、周圍の林は漸くその本性のまに〳〵、勝手に白つぼいのや赤つぼいのや黄色つぼいのや種種に茂つて、それが氣がついた時に急いで一つの深い緑になるのである。

雜木林のそこらこゝらに散在してゐる開墾地の麥もすつと首を出し、蠶豆の花も可憐な黑い瞳を聚めて羞かしさうに葉の間からこつそり四方を覗く。雜木林の間にはまた芒の硬直な葉が空を刺さうとして立つ。その麥や芒の下に居を求める雲雀が時々空を占めて、春が更けたと呼びかける。さうすると、その同族の聲だけが空間を支配してゐるべきはずだと思つてゐる蛙は、その囀る聲を壓し去らうとして、互の身體を飛び越え〳〵鳴きたてるので、小勢な雲雀はすつとおりて、麥や芒の根に潜んでしまふ。さうして、蛙の鳴かない日中にだけこれを仰げば、眩ゆさに堪へないやう



山村の早春（吹田草牧筆）

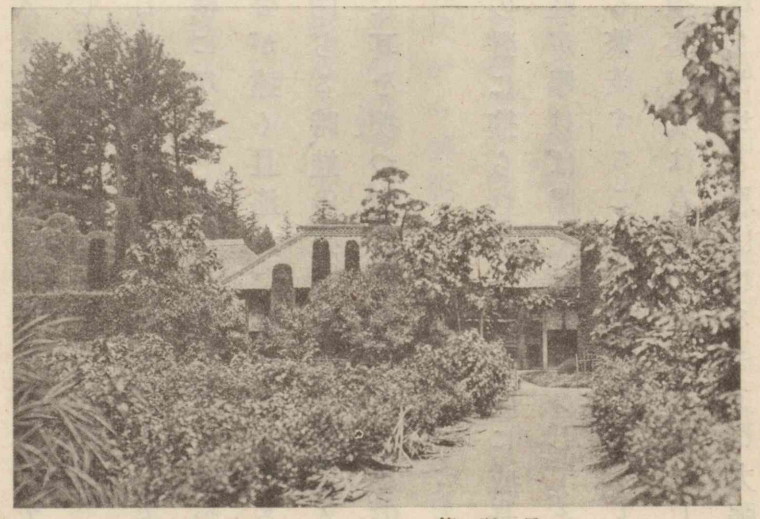
立して、たゞ空へ〳〵と暖かな光を求めて一切の草木は土と直角の度をぢつと引留めて放さない。それで

に、その身を遙かに煌めく日の光の中に沒して、その小さな喉の破れるまでは劇しく鳴かうとするのである。蛙は愈〻益〻鳴きほこつて、樫の木のやうな大きな常磐木の古葉をも一時にからりと落さねば止むまいとする。

この時凡べての樹木やそれから冬季の間はぐつたりと地に附いてゐた凡べての雜草が爪を求めて止まない。土がそれを

保つてゐる。

冬季の間は土と平行することを好んでゐた人も、鐵の針が磁石に吸はれるやうに土に直立して、めいめいに手に農具を執る。紺の股引を藁で括つて皆田を耕し始める。水が欲しいと思ふ時、蛙は一齊に裂けるかと思ふほど喉の袋を膨脹させて、身を撼かしながら殊更に鳴きだてる。白い絃絲のやうな雨は水が田に滿ちるまで注いでまた注ぐ。鳴くべき時に鳴くためにだけ生れて來た蛙



長塚節の生れた家

は、刈株を引返し〳〵働いてゐる人々の周圍から足下から逼つて、敏捷にその手を動かせ〳〵と促して止まない。

蛙がぴつたりと聲を呑む時には、日中の暖かさに人もぐつたりとなつて、田圃の短い草にごろりと横になる。更にひつそりと靜かな夜になると、蛙はいかに自分の聲が遠く且遙かに響くかを誇るやうに、力を極めて鳴く。雨戸を閉ぢる時、蛙の聲はめつきり遠く距たつて、それがぐつたりと疲れた耳を擽つて、百姓の凡べてを安らかな眠に誘ふのである。

草木は遠く遙かに響けと鳴く蛙の聲に搖られつゝ、夜の間に成長する。櫟や楢やその他の雜木は、蛙が鳴けば鳴くほど、さうして、それが鳴きやむ季節までは、幾らでも繁茂することを繼續しようとする。そこには毛蟲やその他の損害が或は有るにしても、しとしとと屢梢を打つ雨が空の蒼さを移したかと思はれるまでに力强

い綠が地上を掩うて、爽やかな涼しい蔭を作るのである。（土）

三七　北京の街

鶴見祐輔

北京の街を歩いて居る時には、我々は全く時間の觀念から脫却して了ふ。それは七時半の夕食の約束時間に間に合ふ合はないの程度ではなく、我々は二十世紀の現代から解脫して了ふ。悠久な人文發達の跡を眼のあたり見て、六千年の文化の消長の中に棲息しながら、これが人生であると眼が覺める。十年百年は問題でない。況や一年二年をや。

支那人の落着いたゆつたりした心持は、やがて北京街に居る外國人の性急を征服して了ふ。そして、その街路、それは同じ所を何度歩いて見ても、少しも見飽かない眺である。四方に聳える樓門の高いことを言はなくても、遙かに見える宮殿の甍の黃と綠である

鶴見祐輔　群馬縣の人、明治十八年生、政治家。

北京城内の駱駝

ことを說かなくても、狹い路地の內にも、賑やかな商業街の光景にも、掬するに餘りある人間味が溢れて居る。

第一に我々を牽きつけるものは北京の色である。支那の家屋は皆鼠色である。それは生氣も變化もない鼠色の濃淡である。——屋根瓦も塀も。しかし、その凡べての鼠色の自然色の中に、門の扉や柱は大膽な朱を塗つて、その輪郭を黑で彩り、これに紺と靑とをあしらつて、さてその右側に大きな金の門札に、「張寓」などと黑で筆太々と記したりしてあるのが我々を驚かす。そして、門のすぐ後にある惡魔除の扉が目に着く。これは、惡魔は眼がないので、眞直に門から飛びこんで來て、この扉にぶつかつて死ぬといふので設けてあるのである。そこを眼のあいた支那の從者が、右手に高く來客の名刺を揭げながら案內して行く。門の兩側にはよく石の獅子などが置いてある。

しかし、人を驚かす光景は、生きた人間と動物とである。殊に日本のやうに、人間と動物との間に親みのない國から行くものは、支那の大都會の中を愉快げに人間と同格で歩いて來るいろ〳〵な動物の姿態に心を牽かれる。

北京城内で始めて駱駝を見る人は、必ず一度は足を停めて、その莊嚴な後姿を見送るであらう。あの駱駝が首をすつくと高く擧げて、少し顎をしやくり氣味に後へ引いて、そして、悠々と歩足を整へて歩いて來る樣は、何としても動物の中の貴族である。そして、いかなる雜沓の巷でも、彼だけは一頭地を抜いたまゝで、冷やかなながし眼に下界の光景を見おろして居る。その無關心な超然とした態度が面憎いほど落着いて居る。その總々と垂れた褐色の毛で、安全に冬の寒さから守られて居る彼は、淅瀝たる朔風の間に立つても、あわてもわるびれもせず、昂々焉として聳立して居る。動

物の中で一番自尊心の強いものは駱駝であるに相違ない。彼は*プラトーのやうな貴族主義者である。Plato

その傍を驢馬に乘つた支那人が通る。幾十羽かの鶩（あひる）を追ひながら農夫が行く。豚が路地から一散に走り出す。物賣の支那人が天も破れよとばかりどなり立てる。一人の客を目がけて二十餘人の車夫が轅棒をつきつける。その混雜と不統一の壓卷として、黑帽黃線の支那巡警が、のつそりかんと町の眞中につゝ立つて居る。（思想・山水・人物）

新制女子國語讀本　第二修正版　卷六　終

*プラトー　ギリシャ古代の有名な哲學者。（前427―前347）

□新制女子國語讀本□

大正十一年十月廿七日印刷
大正十二年一月四日訂正再版印刷
大正十三年九月十一日修正三版印刷
昭和二年九月二十三日修正四版印刷
昭和三年一月十一日訂正五版印刷

著作者　東京開成館編輯所　代表者　松本繁吉

大正十一年十月三十日發行
大正十二年一月七日訂正再版發行
大正十三年九月十五日修正三版發行
昭和二年九月二十六日修正四版發行
昭和三年一月十四日訂正五版發行

發行者　東京市小石川區小日向水道町八十四番地　株式會社　東京開成館　代表者　松本繁吉

印刷者　東京市小石川區西江戸川町二十一番地　佐々木俊一

發行所　東京市小石川區小日向水道町八十四番地　株式會社　東京開成館　〔振替貯金口座〕東京第五三二二番

定價　六…一卷　各金六拾七錢　十…七卷　各金六拾參錢

富士印刷株式會社印刷

茅三郎子年一組　奥田幹十